

K-511

米沢市歴史文化財調査報告書 第14集

上 浅 川

1次・2次調査報告書

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書

上浅川遺跡

昭和60年3月

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、米沢市経済部農林課の新農業構造改善事業に伴って、本市教育委員会が昭和59年5月から11月まで2次にわたり実施した、上浅川遺跡緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

本遺跡は戸塚山東方山麓から大字上浅川、同長手にかけて広がる約二十万平方メートルの遺跡であり、奈良時代の集落跡を中心に、縄文時代中期や平安時代から室町時代に亘る遺跡が分布しております。今回の調査で、奈良時代の集落跡は戸塚山古墳群の大半を占める終末期古墳と同時期のものであることが判明しました。このことから、上浅川遺跡は古墳群の構築者や被埋葬者と密接な係わりをもつ集落跡と推測されます。また、本遺跡からは数多くの遺物が検出され、中でも木偶像人形や絵馬などは全国的にみても出土例が少なく、古代宗教を研究するうえで極めて貴重な資料といえます。

本市教育委員会では、置賜地方の歴史と文化を探究し、豊かな住みよい郷土を築くため、埋蔵文化財の保護保存にいつそう努力する所存でございます。本書が、市民皆様の埋蔵文化財に対する愛護精神の啓蒙にいささかなりとも貢献できれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査にあたり格別のご協力、ご配慮を賜りました文化庁、山形県教育庁文化課、地元上郷史跡保存会、地権者及び上浅川地区の皆様、さらに本市経済部農林課に対し、心から感謝申し上げます。

昭和60年3月30日

米沢市教育委員会

教育長 北目乙郎

例 言

1. 本報告書は昭和59年5月7日～同年6月20日と同年10月23日～同年11月14日に実施した米沢市大字上浅川、同長手地内の新農業構造改善事業に係る土地基盤整備事業工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は、米沢市教育委員会が主体となって、米沢市経済部農林課と協議のうえ実施したものである。

3. 調査体制は次の通りである。

調査総括 黒田信介 米沢市教育委員会社会教育課長

調査担当 手塚 孝

調査主任 亀田英明

同 副 菊地政信

調査員 小松佳子、赤木美智夫、

同補助員 門脇耕一、中島正己、堤佳代子、我妻徳枝、佐藤弘則

作業員 伊藤清美、原 三郎、本田利雄、我妻益男、佐藤庄作、後藤定雄

調査協力 星 宗男、岡 道雄、渡部邦雄、佐藤峯雄、結城義蔵、武田喜一、本田農夫男
鈴木文雄、鈴木周一、鈴木孝八、杉原智美、伊藤 操、佐藤彦助、伊藤真一郎
佐藤弘雄、佐藤善能、伊藤敏郎、伊藤 功、鈴木金六、本田次作、本田隆次郎
猪野良一、本田嘉則、本田嘉蔵、本田陽雄、本田嘉男、本田房雄、まんどり会
上郷史跡保存会、米沢市経済部農林課、梓川土地改良区、地元地権者
山形県教育庁文化課（順不同、敬称略）

事務局長 登坂 功

事務局 木村塚美、森谷幸彦、竹田雅之

4. 挿図の縮尺は遺構を60分の1、40分の1、土器の実測図、拓影図を2分の1、3分の1、石器の実測図を1.5分の1、磔を3分の1、5分の1とした。写真図版は、縮尺不同とし、各図版にスケールで示した。挿図に用いた北の方向は真北に統一した。

5. 本書の作成は手塚 孝、菊地政信が中心となり、亀田英明と小松佳子が補佐し、編集は手塚責任校正は木村塚美、竹田雅之がその責務に当たった。

本文目次

序文	
題字	亀田 昊明(大覚院住職)
例言	
1 遺跡の概要	1
2 調査の経過	1
1) 1次調査	4
2) 2次調査	4
3 遺構の概要	6
1) 1次調査の遺構	6
2) 2次調査の遺構	29
4 遺物	29
1) 1次調査出土の土器	29
2) 2次調査出土の土器	30
3) 曜	35
4) 木器	42
5 まとめ	53

挿図目次

第1図	上浅川遺跡周辺の遺跡分布図	2
第2図	上浅川遺跡グリッド配図	3
第3図	上浅川遺跡発掘調査区全体図	5
第4図	上浅川遺跡第1次調査遺構全体図(1)	7
第5図	上浅川遺跡第1次調査BY1平面図	8
第6図	上浅川遺跡第1次調査BY2平面図	9
第7図	上浅川遺跡第1次調査遺構全体図(2)	10
第8図	上浅川遺跡第1次調査BY3平面図	12
第9図	上浅川遺跡第1次調査遺構全体図(3)	13
第10図	上浅川遺跡第1次調査BY1平面図	14
第11図	上浅川遺跡第1次調査遺構全体図(4)	17
第12図	上浅川遺跡第1次調査KY1平面図	18
第13図	上浅川遺跡第1次調査KY1, KY2平面図	19
第14図	上浅川遺跡第1次調査KY2, KY37平面図	20
第15図	上浅川遺跡第1次調査KY3平面図	21
第16図	上浅川遺跡第1次調査KY3, KY6, KY12平面図	22
第17図	上浅川遺跡第1次調査KY4, KY12平面図	23
第18図	上浅川遺跡第1次調査KY4平面図	24
第19図	上浅川遺跡第1次調査KY4, KY16, KY29, KY30, KY31平面図	25
第20図	上浅川遺跡第1次調査KY17平面図(1)	26
第21図	上浅川遺跡第1次調査KY17平面図(2)	27
第22図	上浅川遺跡第2次調査KY49平面図	28
第23図	上浅川遺跡第1次調査出土土器拓影図	31
第24図	上浅川遺跡第1次調査出土土器実測図	32
第25図	上浅川遺跡第1次, 2次調査出土土器実測図	33
第26図	上浅川遺跡第1次調査出土石臼実測図	36

第27図	上浅川遺跡第1次調査出土確実測図	37
第28図	上浅川遺跡第1次調査出土確実測図	38
第29図	上浅川遺跡第1次調査出土確実測図	39
第30図	上浅川遺跡第1次、2次調査出土確実測図、石器実測図	40
第31図	上浅川遺跡第1次調査出土木器実測図	44
第32図	上浅川遺跡第1次調査出土木器実測図	45
第33図	上浅川遺跡第1次、2次調査出土木器実測図	46
第34図	上浅川遺跡第2次調査出土土器拓影図、第1次、2次調査出土木器実測図	48
第35図	上浅川遺跡第2次調査出土土器実測図	49
第36図	上浅川遺跡第2次調査出土土器実測図	50
第37図	上浅川遺跡第1次調査出土木器実測図、第2次調査出土土器実測図	51
第38図	上浅川遺跡第2次調査出土高坏破損分類図	52

付 表 目 次

第1表	上浅川遺跡第1次調査遺構層序観察図	15
-----	-------------------	----

図 版 目 次

第一図版	上浅川遺跡第1次調査の発掘(一) 発掘前状況 遺構全景
第二図版	上浅川遺跡第1次調査の発掘(二) K Y 1・K Y 2 発掘状況 木偶状人形出土状況
第三図版	上浅川遺跡第1次調査出土の土器(一)
第四図版	上浅川遺跡第1次調査出土の土器(二)
第五図版	上浅川遺跡第1次調査出土の土器(三)
第六図版	上浅川遺跡第1次調査出土の土器(四)
第七図版	上浅川遺跡第1次調査出土の土器(五)
第八図版	上浅川遺跡第1次調査出土の土器(六)
第九図版	上浅川遺跡第1次調査出土の礫器(一)
第十図版	上浅川遺跡第1次調査出土の礫器(二)
第十一図版	上浅川遺跡第1次調査出土の礫器(三)
第十二図版	上浅川遺跡第1次調査出土の木器(一)
第十三図版	上浅川遺跡第1次調査出土の木器(二)
第十四図版	上浅川遺跡第2次調査の発掘(一) 発掘前状況 発掘状況
第十五図版	上浅川遺跡第2次調査の発掘(二) K Y 49北壁セクション K Y 49発掘全景
第十六図版	上浅川遺跡第2次調査出土の土器(一)
第十七図版	上浅川遺跡第2次調査出土の土器(二)
第十八図版	上浅川遺跡第2次調査出土の土器(三)
第十九図版	上浅川遺跡第2次調査出土の土器(四)
第二十図版	上浅川遺跡第2次調査出土の土器(五)
第二十一図版	上浅川遺跡第2次調査出土の木器(一)

1 遺跡の概要

本遺跡は米沢市大字上浅川、同長手に所在する。標高356.6mの戸塚山の東山麓に位置する浅川堤から東方の萩の森にかけての水田地帯に広く分布している。

遺跡は昭和30年に亀田晃明によって発見され、縄文時代中期の遺跡として今日まで注目されて来たが、昭和57年～59年の分布調査では、さらに奈良時代から平安、中世の遺跡も存在することが判明した。上浅川遺跡の他にも、戸塚山周辺にはNo.334の萩の森遺跡、No.339の荒屋遺跡、No.320の葉師山古墳群（墳墓）、No.19の堂田遺跡、No.15の森合遺跡等々戸塚山古墳を中心とした2km周辺だけでも51ヶ所の遺跡が密集する米沢屈指の大遺跡群となった。第1図参照

これらの新遺跡の大半は古墳時代終末期から奈良時代～中世にかけての比較的新しい遺跡が多く、戸塚山古墳群との関連性も含め、注目される地域でもある。

こうした背景には、昭和58年に国の国庫補助をうけて米沢市教育委員会が実施した戸塚山古墳群詳細分布調査の成果が大ききことは言うまでもない。戸塚山古墳群は現存するものだけでも195基を数え、県内最大の古墳群である。この中には東日本で北限となる帆立貝式古墳や、全長54mの前方後円墳、その他北斜面からは150基にのぼる中世期の塚群も発見され県内外から熱い期待が寄せられている山である。

そうした折、昭和58年には上郷北部の上浅川、長手萩の森地区一帯が、新農業構造改善事業の一環とする土地基盤整備事業計画が着工する運びとなり、上浅川遺跡の大半が計画範囲内に加わることとなった。米沢市教育委員会では山形県教育庁文化課、米沢市経済部農林課と協議を重ね、57年10月に県文化課園場整備関係者立合のもとに試掘を実施し、遺物と遺構の集中箇所の把握を行なった。

その結果、浅川堤から瑞雲院にかけて縄文中期の遺構群（a地点）を初め堤の右下から道路を境にした西側一帯に奈良時代の集落（b～d地点）、さらに道路の東側となる萩の森にかけて平安～中世の集落跡（e地点）の集中箇所を確認し、遺跡の総面積が20万㎡を有することが判った。第2図参照

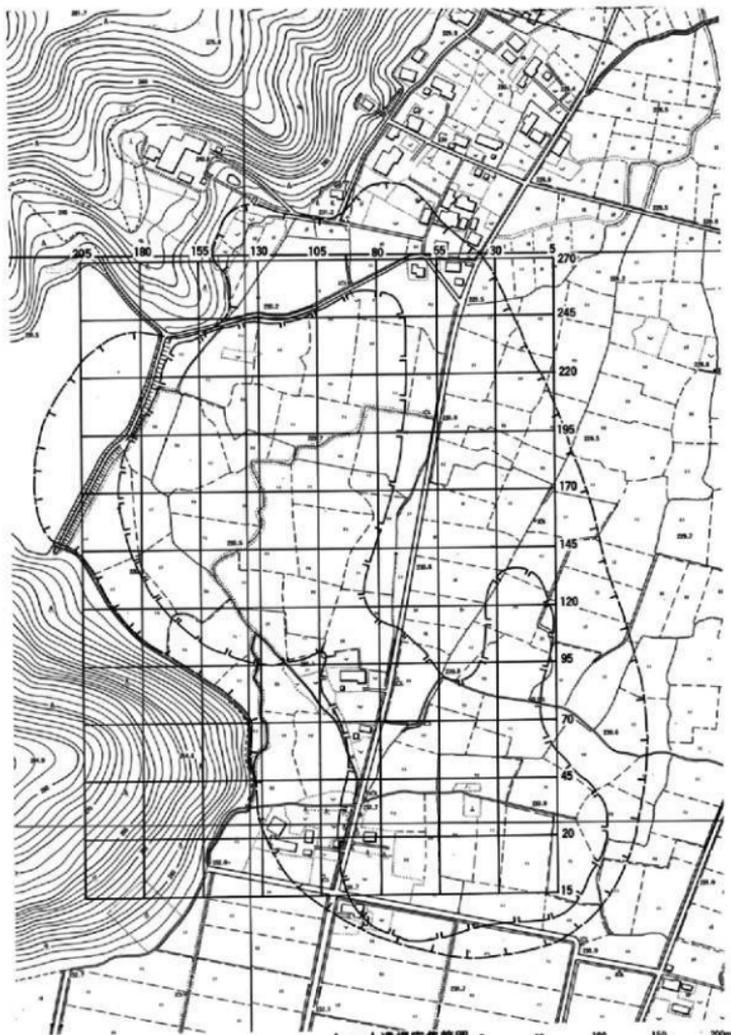
この結果を基にして、上浅川遺跡緊急発掘調査の計画が昭和59年から進められることになった。

2 調査の経過

遺構の分布状況を考慮して道路を境にした東側を1次調査で完了させ、上浅川遺跡の中心部と推測される西側を2次調査で遺構の密集範囲を確認し、昭和60年度の3次調査の事前調査とする方法で進めることにした。調査はグリッド法を用いることにし、基準線を真北に、南北550m、東西400mの220,000㎡を設定する。第2図、グリッドの最小単位は2×2mとし、8×8mのグリッドを主要調査単位とすることにした。園場整備の都合上、道路を境にした東側を春に行い西側



第1図 上浅川遺跡周辺の遺跡分布図



第2図 上浅川遺跡グリッド配図

遺構密集範囲

1-1 遺跡範囲

の2次調査は稲刈終了後の秋に行うこととなった。以下1次調査、2次調査の経過を簡単に触れてみる。

1) 1次調査

昭和59年5月7日～同年6月20日ののべ43日。5月7日より着手する。東側の遺構の集中箇所を把握するために東西2×230mのトレンチ（G30—5～120G）と2×20mトレンチ2本（G15—131～140G、G15—111～120G）東西線として2×50m（31～55—71G）、2×40m（31～50—45G）の2本を掘り下げる。各トレンチ内からは23～30cm位の小柱穴群が認められたが、最も多く検出されたG31～47—8～24の範囲を精査区と設定することにした。拡張区の調査は5月8日から入り精査を中心に進めた結果、おびたしい柱穴群が検出され、建物跡を確認することは困難であった。他に48基の溝状遺構が発見され、この中には貴重な木器や土器類が出土している。調査は多数の柱穴を組み合わせる作業に大幅に時間を費やしたこともあって、柱穴を掘り下げることは不可能となったことは残念である。

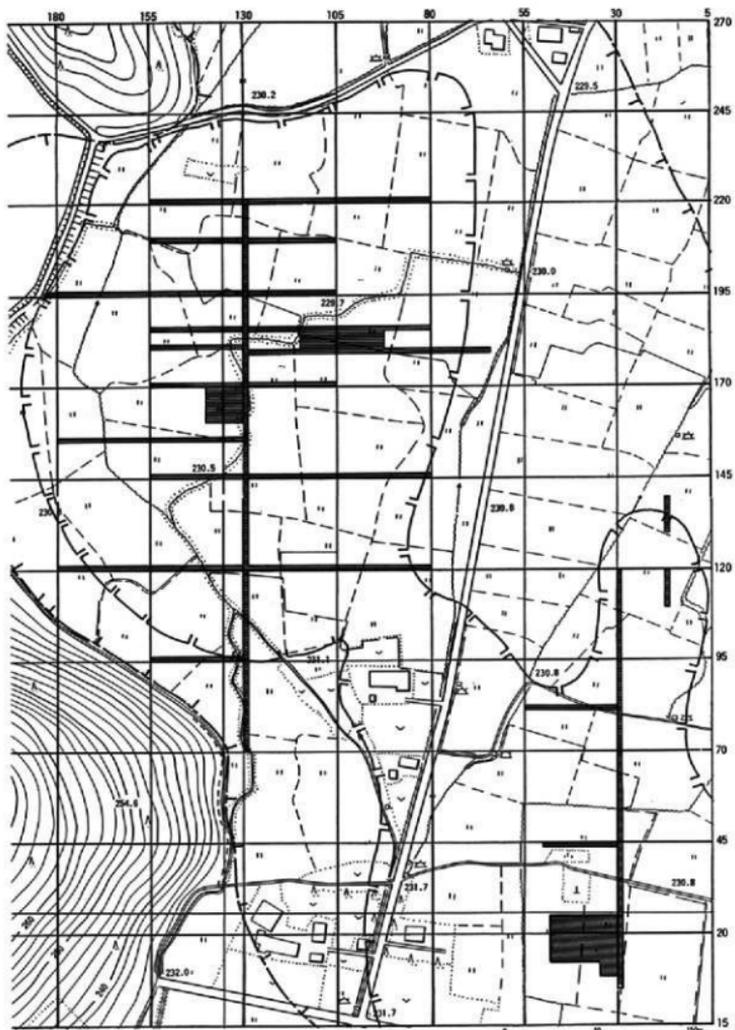
ちなみに重機による粗掘は5月7日～5月11日、面整理、精査を5月8日～5月21日、遺構掘り下げ、図面作成を5月22日～6月20日である。

2) 2次調査

昭和59年10月22日～同年11月14日ののべ20日。稲刈終了後を待って10月22日から着手することになった。2次調査は昭和60年度（最終調査）の3次調査の精査面積の設定を把握することもあって、重機を用いたトレンチを数多く配して遺構の広がり分布状況を調べる方法をとることにした。西側の遺構のほぼ中心と考えられる2×300m（G30—71～220）の南北線を基本トレンチとして、東西に十字状にトレンチを配することにした。トレンチは北側からG81～155—221、G106～185—196、G106～155—171、G81～155—146、G81～181—121、G131～155—96と50m間隔で東西に配し、遺構の分布状況から中間にG106～155—211、G81～155—186、G131～155—181、G81～130—180、G131～180—156と50m～200mのトレンチを必要に応じ、計12本3260㎡を設定した。

さらに遺構の性格をみるためにG131～140—161～170、G92～115—180～186を掘り下げることにする。調査は重機による粗掘と平行してトレンチ内の面整理を10月24日～11月1日、拡張区の掘り下げを11月5日～11月8日に行い、図面作成、記録を11月9日～11月14日の順に進めた。

この結果、3～15m位の溝状遺構が5基と多数の柱穴群、竪穴住居と考えられる落ち込み2箇所等が検出された。ことに溝状内からは完形に近い土器類と木器が多量に含まれているのが判り、3次調査に期待される成果は大きい。



第3図 浅川遺跡発掘調査区全体図

3 遺構の概要

上浅川遺跡は、昭和58年度の試掘調査と今回の1次、2次調査の成果より第2図に示した様な遺構分布を有する。丁度遺跡を境にして東側が中世の遺構群が主体的に分布し、反対の西側が縄文中期と奈良時代の遺構が集中する特徴がみられる。しかも西側の遺構（以下西区とする）は戸塚山古墳群との係わりもあって、正確な遺構の分布状況を明らかにし、今後の調査の資料を得ることが2次調査の目的であった。

従って2次調査では、トレンチによる遺構の集中範囲を把握するにとどめ、精査はKY49の一部を調査したのにすぎない。

1次調査は遺跡東側（以下東区とする）の範囲が昭和59年度の圃場整備区画として修了する計画であることもあって、1次調査に重点を置いた。遺構は予想以上に存在し、十分な調査を行うことは不可能であったが、掘立建物跡3棟を含む1282基の遺構が検出された。以下1次調査を中心に遺構について述べてみる。

1) 1次調査の遺構

1次調査で検出された遺構は、柱穴跡1170基、礎石、もしくは集石をもつ柱穴39基、溝状遺構48基、集石遺構8基、不明ビット17基の計1282基であり、この中には掘立建物跡3棟と礎石を有する建物跡1棟が含まれている。遺構の殆んどは複数の切り合い関係を示し、明瞭な把握は困難であった。以下検出された遺構の説明に入る。

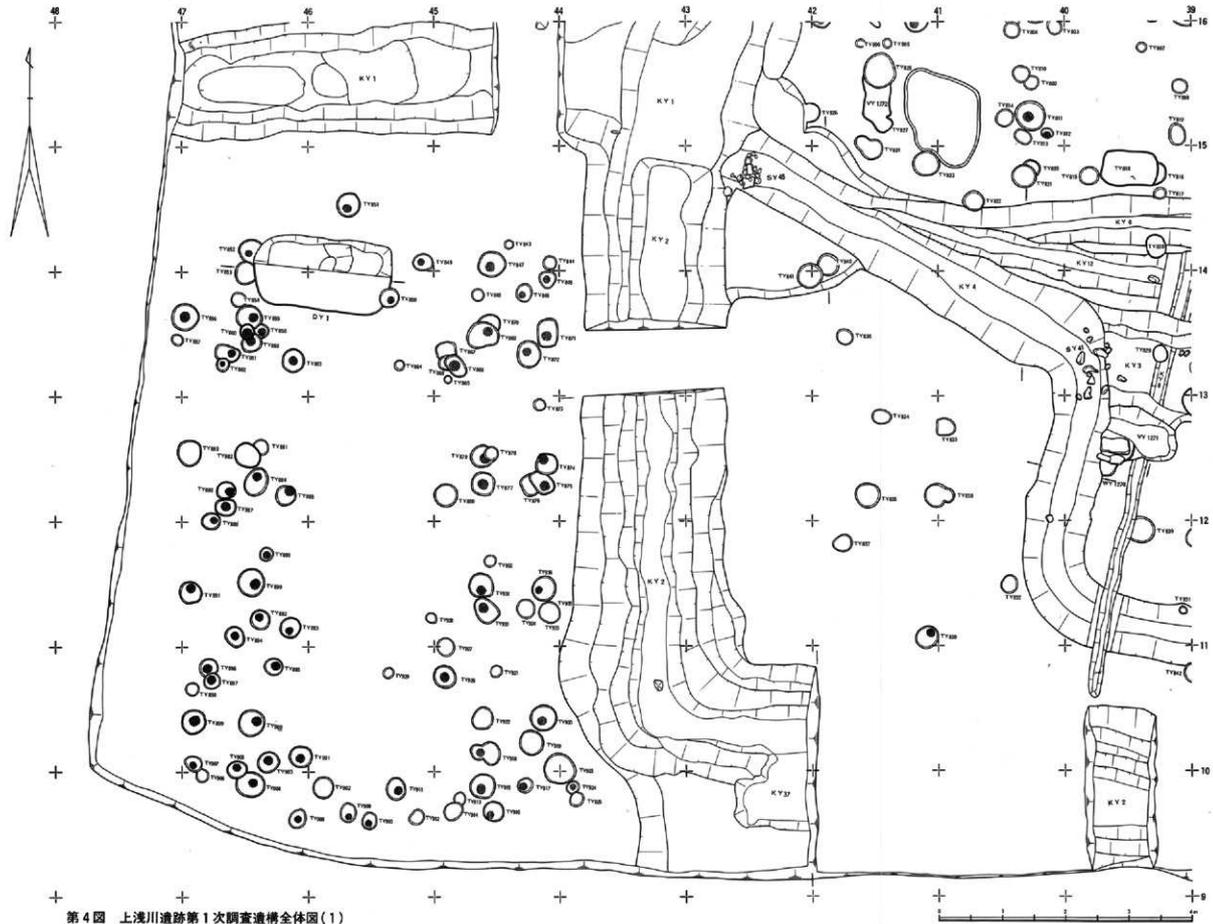
a 建物跡〔第4図～第11図、第1図版〕

G45-47-10-15の拡張区西南コーナー部とG31-41-16-24の拡張区北東寄りの2ヶ所に建物跡とみられる柱穴群が検出されている。柱穴の大半は2-13回位の切り合いを有するものが多くほぼ同一箇所による短期間の立て替えが行なわれたものと推測される。しかも柱穴群〔建物〕はKY1、KY2等の溝状遺構によって区画された内外に設置するものとみられ、柱穴の存在しないG44-47-16-24や、G31-41-7-11は意図的なものと考えられる。柱穴の多くは20cm-135cmと不規則であり、すべて円形や楕円形を示すものが特徴である。また柱穴の約半数以上には柱の痕跡を示すアタリが認められ、うちTY602を含む13基に柱痕を残すものがあった。

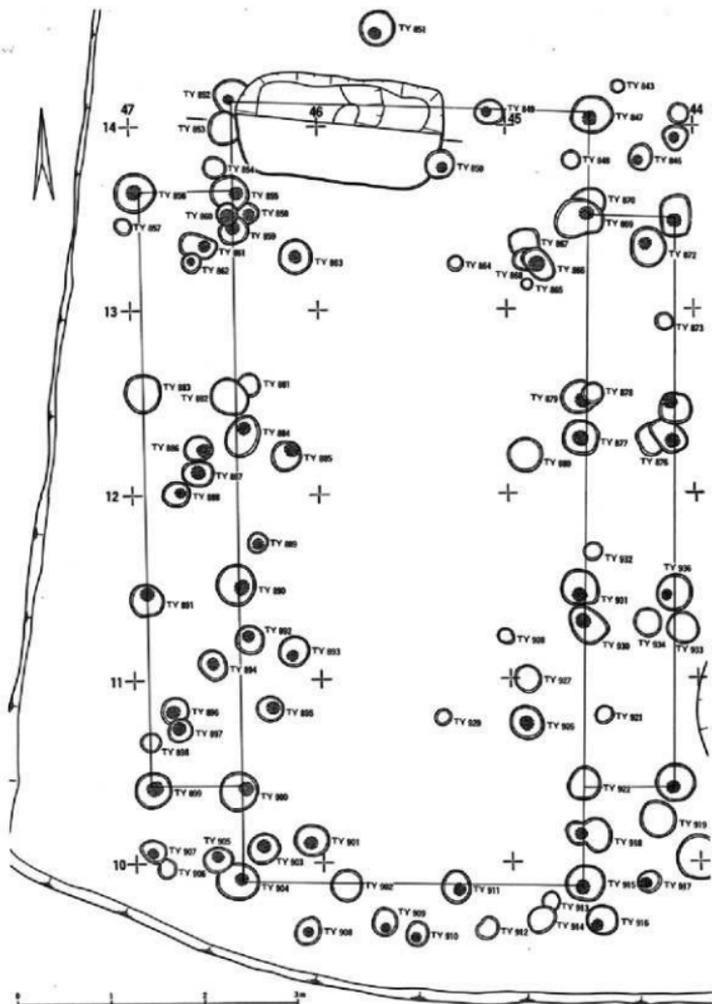
こういった状況から推測して、柱の大きさは15cm-35cm位を有していた可能性がある。柱を設置する掘り方は、先述した様に不規則であるが平均50cm位で深さも25cm-70cmを呈し、平均45cm位をなす。これらの柱穴は切り合い関係の吟味から少なくとも5-7期の年代に亘って、存在したものと考えられ、後述するが土器等の分析より13世紀-15世紀が中心的な年代と考えられる。

ただし、土器類の中には8世紀にのぼるものや、16-18世紀位の比較的新しい陶器類が含まれていることから、これらの遺構も存在する可能性がある。

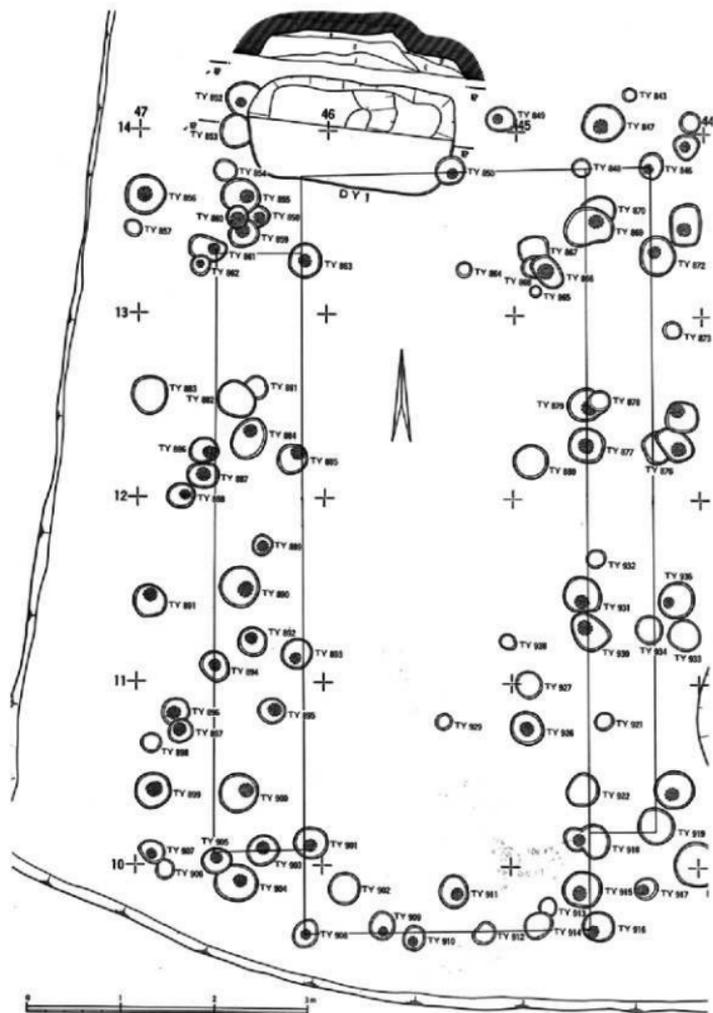
BY1〔第4図、第5図〕



第4図 上浅川遺跡第1次調査遺構全体図(1)



第5図 上浅川遺跡第1次調査BY1平面図



第6図 上浅川道跡第1次調査BY 2平面図

G44-47-10-15のKY1南, KY2の西側に位置する。ほぼ真北を基準線にして南北5間, 東西3間をなし, 東西面に庇を有する建物である。間尺は南北より3尺×7尺×7尺×7尺×3尺, 東西で4尺×3尺×4尺と北端と南端の間尺が狭く庇的要素を有し, 東西も中間を1尺短くする特徴がみられる。庇は東西とも3尺幅をなし, 7尺3間を張り出して各コーナー部の隅柱を除く方法をとっている。柱の掘り方はすべて円形を有し30~45cmと平均的で, 柱痕跡は12~20cmである。

BY2〔第4図, 第6図〕

全体的な間取り, 方向は先のBY1と同様である。BY1を切って構築していることから, BY1の後にBY2を建替えたと考えられる。南北5間×東西3間で西と東側に庇をもつ。間尺は南北が3尺×7尺×7尺×7尺×3尺, 東西が西より3尺×3尺×4尺とBY1に比べ東端の1間を1尺広くしている。庇は西側が南北端を抜く7尺3間の3尺幅を有するのに対し, 東側は2尺と狭く, 南隅柱を除くのみで7尺×7尺×7尺×3尺と北隅の柱も用いている。

柱穴の大きさ, 柱痕跡はBY1と同様である。基本的には先のBY1と同規格で構築したと考えて良いものとみる。その他BY1, BY2の有する建物跡内には, TY867, TY880, TY927の8尺3間やTY861, TY886, TY894の7尺3間を有する柱穴もあり, 他にも同規模の建物が数回の建替えが行なわれたものと推測されるものの明確な間尺等は確認出来なかった。

BY3〔第7図~第9図〕

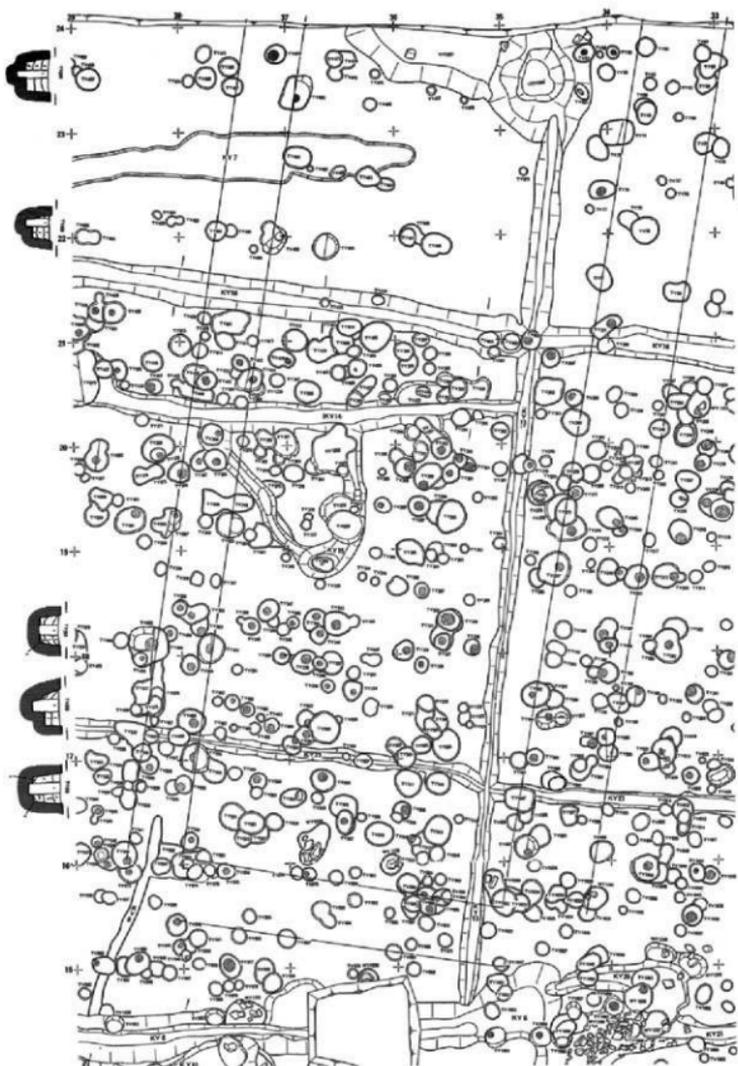
G33-39-16-24にかけて検出されたもので, 北側が未調査範囲内に加わっている為に全体の大きさは不明であるが, ほぼ真北を主軸長とする東西3間, 南北6間以上で東西と南に庇を有する掘立建物跡である。南北間の間尺は南から7尺×7尺×7尺×9尺×9尺×9尺×(7尺)×(7尺)と東西間の間尺は7尺×7尺×7尺と等間隔を呈し, 庇は南が4尺3間, 西が4尺6間以上(8間?), 東が5尺6間以上(8間?)となる。北側は不明であるが北にも庇をもつ4面庇の3間×8間の建物とみられる。柱穴の掘り方は30~120cmで深さ40~60cmをなす。柱の大きさは柱痕跡(アタリ)の状況からみて20~38cm位と推測される。

ZY1〔第7図, 第9図, 第10図〕

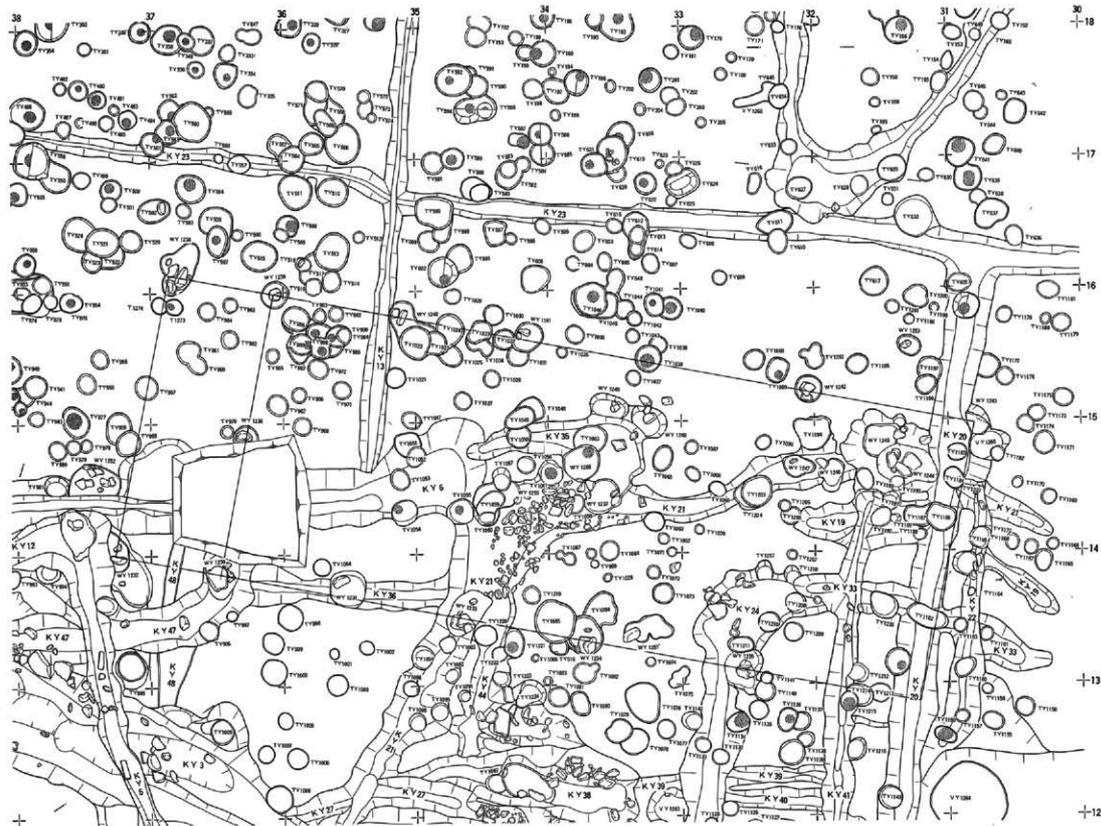
G30-36-14-17にかけて検出された東西長の建物跡である。柱の掘り方内上部に人頭大の円礫や軽石凝灰岩20~40cm位の割石を設るもので掘り方内部に柱痕跡が認められないことから, 礎石を有する建物跡と考えられる。1間(?)×6間を有し, 西側寄りにWY1236の中柱を設し間尺は南北15尺(7尺×8尺の可能性もある)東西7尺等間隔を有する。掘り方は円形及び不整楕円形を有し, 深さ30~50cmをなす。

b 溝状遺構〔第4図, 第7図, 第9図, 第11図, 第12図~第21図, 第1図版, 第2図版〕

大形のKY1, KY2, KY25の他, クランク状に配されているKY4等, 48基が検出され,



第8図 上浅川遺跡第1次調査BY3平面図



第10図 上浅川道路第1次調査Z-Y1平面図

第1表 上浅川遺跡第1次調査溝状遺構層序観察図

層No	土色	土質	備考	層No	土色	土質	備考	
	DY1				KY17d			
1	暗褐色10YR 5/2	シルト	少量の炭化物を含む	1	黒褐色10YR 5/2	シルト	炭化物を含む	
2	灰褐色N 5/2	泥質シルト		2	暗褐色10YR 5/2	シルト		
3	暗褐色10YR 5/2	シルト		3	黒褐色10YR 5/2	シルト		
4	灰褐色10YR 5/2	泥質シルト		4	暗褐色10YR 5/2	シルト		
5	黒褐色10YR 5/2	シルト			KY17e			
	KY20			1	黒褐色10YR 5/2	シルト	炭化物を少量含む	
1	黒褐色10YR 5/2	シルト	2	暗褐色10YR 5/2	シルト			
2	黒褐色10YR 5/2	シルト	3	暗褐色10YR 5/2	シルト			
	KY14a			4	黒褐色10YR 5/2	シルト		
1	黒褐色10YR 5/2	シルト	炭化粒を微量に含む		KY17f			
2	黒褐色10YR 5/2	シルト		1	黒褐色10YR 5/2	シルト	炭化物を少量含む	
	KY14b			2	暗褐色10YR 5/2	シルト		
1	黒褐色10YR 5/2	シルト		3	黒褐色10YR 5/2	シルト		
2	黒褐色10YR 5/2	シルト			KY16a			
3	黒褐色10YR 5/2	泥質シルト		1	暗褐色10YR 5/2	シルト		5Y系を混雑状に含む
	KY14c			2	褐色7.5YR 5/2	シルト		
1	黒褐色10YR 5/2	シルト		3	黒褐色10YR 5/2	泥質シルト		
2	黒褐色10YR 5/2	シルト			KY31			
	KY16a - b			1	にこい黒褐色10YR 5/2	シルト	5Y系を混雑状に含む	
1	暗褐色10YR 5/2	シルト	2	暗褐色10YR 5/2	シルト			
2	暗褐色10YR 5/2	シルト		KY30				
	KY16c		1	暗褐色10YR 5/2	シルト	10Y系をブロック状に含む		
1	暗褐色10YR 5/2	シルト	2	暗褐色10YR 5/2	シルト			
2	暗褐色10YR 5/2	シルト	3	褐色7.5YR 5/2	シルト			
3	黒褐色10YR 5/2	シルト		TY644				
4	黒褐色7.5YR 5/2	シルト	1	灰色10YR 5/2	シルト			5Y系を混雑状に含む
	KY16d		2	黒褐色10YR 5/2	シルト			
1	暗褐色10YR 5/2	シルト	3	黒褐色10YR 5/2	シルト			
2	暗褐色10YR 5/2	シルト	4	暗褐色10YR 5/2	シルト			
3	暗褐色7.5YR 5/2	シルト		TY480				
	KY2a		1	灰色10YR 5/2	シルト		10G Y系をブロック状に含む	
1	暗褐色10YR 5/2	シルト	2	黒褐色7.5YR 5/2	シルト			
2	灰褐色10YR 5/2	泥質シルト	3	黒褐色10YR 5/2	シルト			
3	灰褐色N 5/2	粘状シルト	4	暗褐色10YR 5/2	シルト			
4	オリーフ灰10Y 5/2	粘状シルト		TY354				
5	灰色7.5Y 5/2	泥質	1	灰色10YR 5/2	シルト	5Y系を混雑状に含む		
6	暗褐色N 5/2	泥質	2	暗褐色10YR 5/2	シルト			
7	灰褐色N 5/2	泥質シルト	3	黒褐色10YR 5/2	シルト			
	KY4a		4	灰褐色N 5/2	粘状シルト			
1	黒褐色10YR 5/2	シルト	5	暗褐色10YR 5/2	シルト			
2	黒褐色10YR 5/2	泥質シルト		TY656				
3	黒褐色7.5YR 5/2	シルト	1	灰色10YR 5/2	シルト		10G Y系をブロック状に含む	
4	黒褐色7.5YR 5/2	泥質シルト	2	暗褐色10YR 5/2	シルト			
5	黒褐色10YR 5/2	シルト	3	暗褐色10YR 5/2	シルト			
6	暗7.5YR 5/2	泥質シルト	4	黒褐色10YR 5/2	泥質シルト			
7	黒10YR 5/2	泥質		TY556				
	KY3d		1	灰色10YR 5/2	シルト	10G Y系シルトをブロック状に含む		
1	黒褐色10YR 5/2	シルト	2	暗褐色10YR 5/2	シルト			
2	黒褐色7.5YR 5/2	泥質シルト	3	黒褐色10YR 5/2	シルト			
3	黒褐色10YR 5/2	シルト	4	黒褐色10YR 5/2	シルト			
4	黒褐色10YR 5/2	シルト	5	暗褐色N 5/2	粘状シルト			
	KY1b							
1	暗褐色10YR 5/2	シルト	少量の炭化物を含む					
2	暗褐色10YR 5/2	シルト						
3	オリーフ黒5Y 5/2	泥質シルト						
4	暗緑灰色10GY 5/2	泥質						
5	緑褐色10GY 5/2	泥質						
			多量の有機物を含む					

次の5類に分類することが可能である。

- ① 2m～8mを有するもので深く、方形状に配されるもの。KY1, KY2, KY25, KY37の4基。
- ② 溝の幅が一定し、断面が「T」字状を有し比較的深いもの。KY4, KY5, KY6, KY11, KY12の5基。
- ③ 20cm～50cmの幅を有し浅く、直線的に配しているもの。KY8, KY9, KY13, KY14, KY16, KY18, KY20, KY23, KY24, KY34, KY41の11基。
- ④ 溝幅が不規則で遺物が含まれなく方向も一定せず底面が不整形を有し浅いもの。KY7, KY10, KY15, KY17, KY19, KY22, KY26, KY27, KY28, KY29, KY30, KY31, KY32, KY33, KY35, KY36, KY39, KY40, KY42, KY43, KY44, KY45, KY46, KY47, KY48の25基
- ⑤ 不定方向を示し浅く内部に集石を有するもの。KY3, KY21, KY38の3基となる。

この中で①のグループは比較的遺物を含み、建物跡を区画する溝と考えられる。②のグループも遺物を含み溝幅や溝の断面も明確であることから建物との関連が予想される。③は①、②のグループを切って溝築しているものが大半で浅く、近世の陶磁器が少量含まれていることから考え、近世に掘り込まれた水田溝やその他のものとみられる。

④は切り合い関係が著しい建物も含まれ、①や②、⑤の溝を切って構築するものが多い。ただし③のグループの溝が本グループの溝を切っている点からして③よりも若干古い時期に掘り込まれたものとみられる。性格は不明と言わざるを得ない。最後の⑤を有する溝は二次焼性を受けた礫を含みZY1の礎石を有する建物跡に近い年代が考えられる。なお年代的には土器から想定して①のグループは13世紀位、②は14～15世紀代、③は17世紀以降、④は15世紀～16世紀頃と考えることができる。

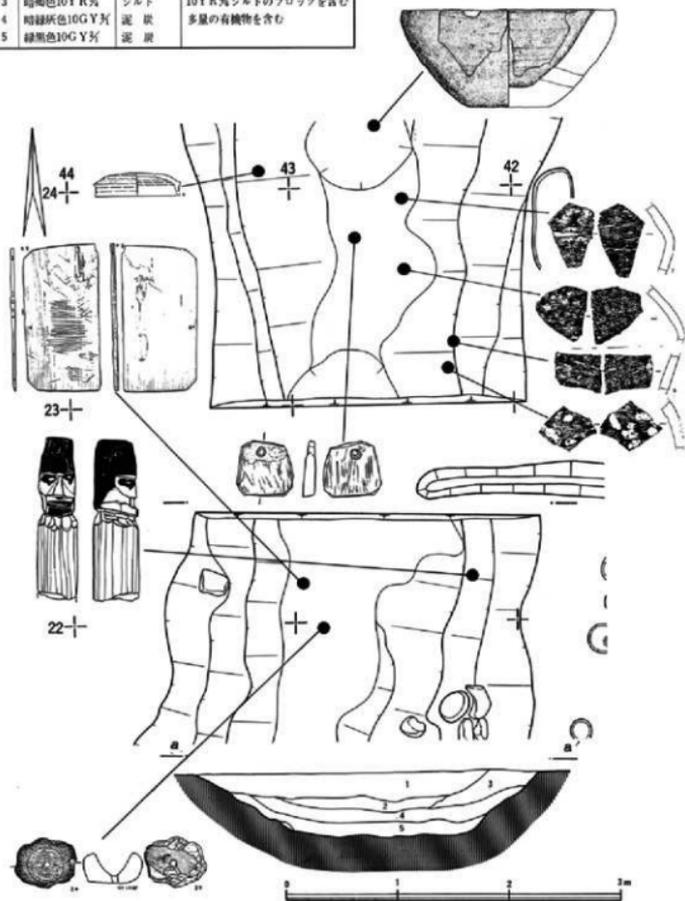
c 集石遺構〔第4図、第7図、第9図、第11図〕

KY1, KY2, KY4の溝覆土とKY3, KY21, KY47の溝底面から検出されたもので、河原石や、泥岩製砥石、凝灰岩の割石等による集石であり、大半はすでに述べている様に二次焼性を受けたものが多い。集石はSY21, SY11, SY3, SY47とSY41, SY42, SY45の8基が存在し、前者は溝の底面に有り、後者は溝の覆土に存在する。ただし溝の覆土に呈する集石はKY3, KY11と同様なレベルを有し同一年代に構築されたものと考えられる。従ってKY1, KY2, KY4は少なくとも溝面に集石をもつKY3, KY21等よりも以前に存在したものと推えよう。性格的には溝の⑤のグループで触れた通りである。

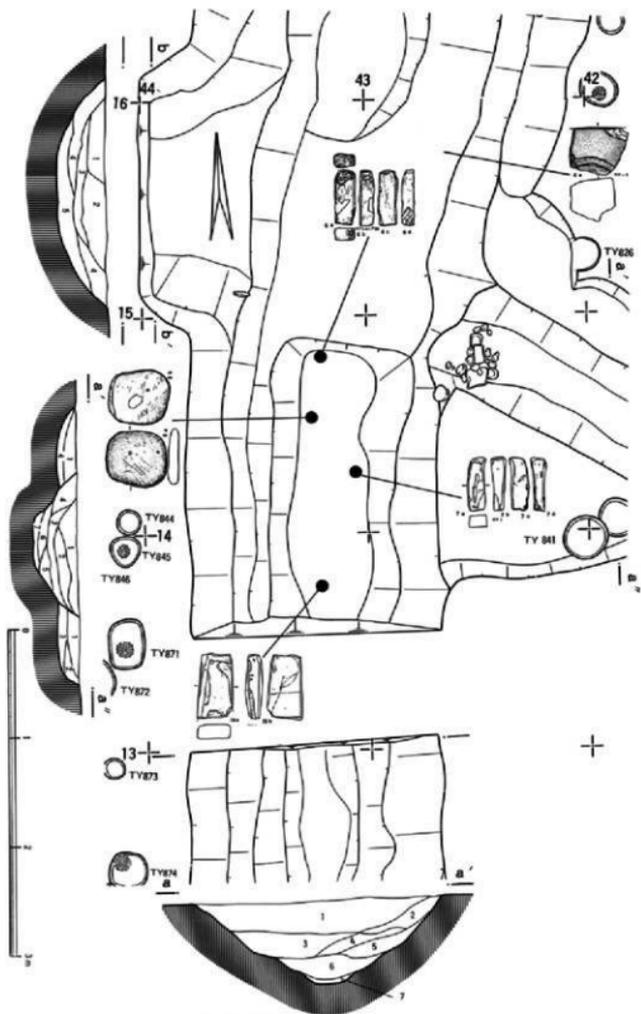
d その他の遺構〔第4図、第6図、第7図、第9図、第11図〕

BY2を切って構築するDY1, G35～37-23・24に位置する大形落ち込み、それに柱穴以外

層号	土色	土質	備考
	KY1a		
1	暗褐色10YR 5/3	シルト	少量の炭化物を含む
2	オリーブ黒5Y 3/1	凝灰シルト	
3	暗褐色10YR 5/3	シルト	10YR 5/3シルトのブロックを含む
4	暗緑灰色10G Y 3/1	凝灰	多量の有機物を含む
5	緑黒色10G Y 3/1	凝灰	

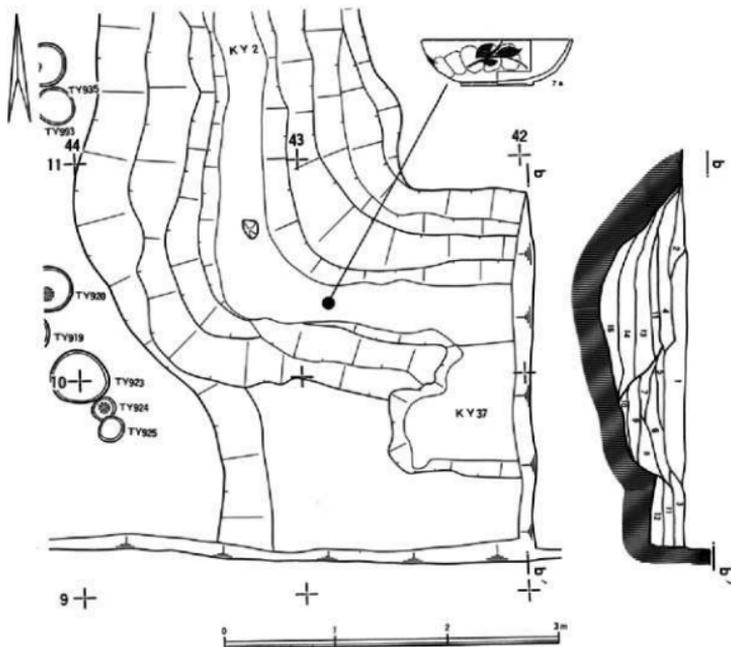


第12図 上浅川遺跡第1次調査KY1平面図



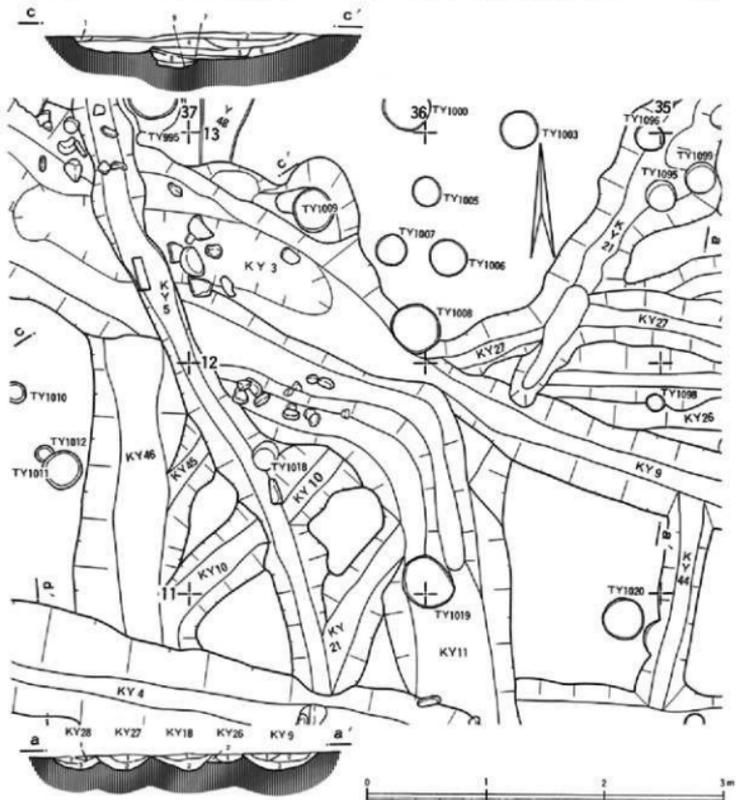
第13図 上浅川遺跡第1次調査KY 1, KY 2平面図

層No	土色	土質	備考	層No	土色	土質	備考
	KY37			9	黒色7.5YR 5/1	泥炭	多量の種子を含む
1	暗褐色10YR 5/1	シルト	多量の炭化物を含む	10	黒色10YR 5/1	泥炭	多量の種子を含む
2	黄灰色10YR 5/1	泥質シルト			KY2b		
3	黄褐色7.5YR 5/1	泥質シルト		11	灰褐色N 5/1	粘質シルト	有機物を含む
4	黄褐色10YR 5/1	シルト		12	黄灰色10YR 5/1	粘質シルト	
5	オリーブ黒5Y 5/1	泥質シルト		13	オリーブ黒10Y 5/1	粘質シルト	
6	暗褐色10YR 5/1	シルト		14	灰色7.5Y 5/1	泥炭	
7	灰褐色N 5/1	粘質シルト	有機物を含む	15	暗灰色N 5/1	泥炭	有機物を含む
8	黄褐色10YR 5/1	シルト					

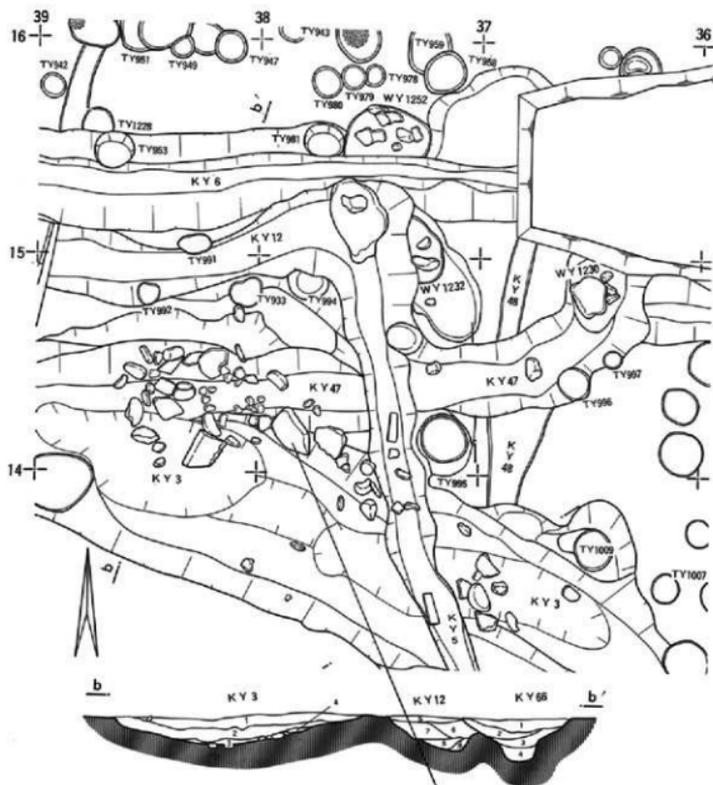


第14図 上浅川遺跡第1次調査KY2, KY37平面図

層No	土色	土質	備考	層No	土色	土質	備考
	KY 3 a			3	暗褐色10Y R 5/	シルト	
1	黒褐色10Y R 5/	シルト			KY 26		
2	黒褐色10Y R 5/	泥質シルト	木炭を凝縮状に含む	1	黒褐色10Y R 5/	泥質シルト	
3	黒色10Y R 5/	泥炭		2	暗褐色10Y R 5/	シルト	
4	黒褐色10Y R 5/	泥炭			KY 18		
5	暗褐色10Y R 5/	シルト	木炭粒微量に含む	1	黒褐色10Y R 5/	シルト	木炭粒を微量に含む
6	暗褐色10Y R 5/	泥質シルト		2	暗褐色10Y R 5/	シルト	
7	暗褐色10Y R 5/	シルト		1	黒褐色10Y R 5/	シルト	
8	黒色10Y R 5/	泥炭		2	黒褐色10Y R 5/	泥炭	
9	暗褐色10Y R 5/	泥炭	木炭粒微量に含む		KY 28		
	KY 9			1	灰黄褐色10Y R 5/	シルト	
1	黒褐色10Y R 5/	シルト		2	黒褐色10Y R 5/	泥質シルト	
2	黒褐色10Y R 5/	シルト		3	黒褐色10Y R 5/	泥炭	

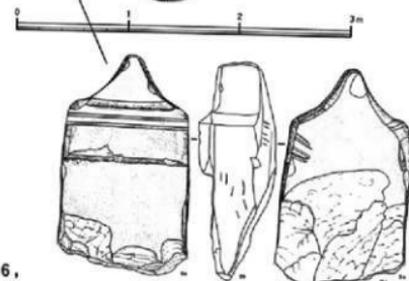


第15図 上浅川遺跡第1次調査KY 3平面図

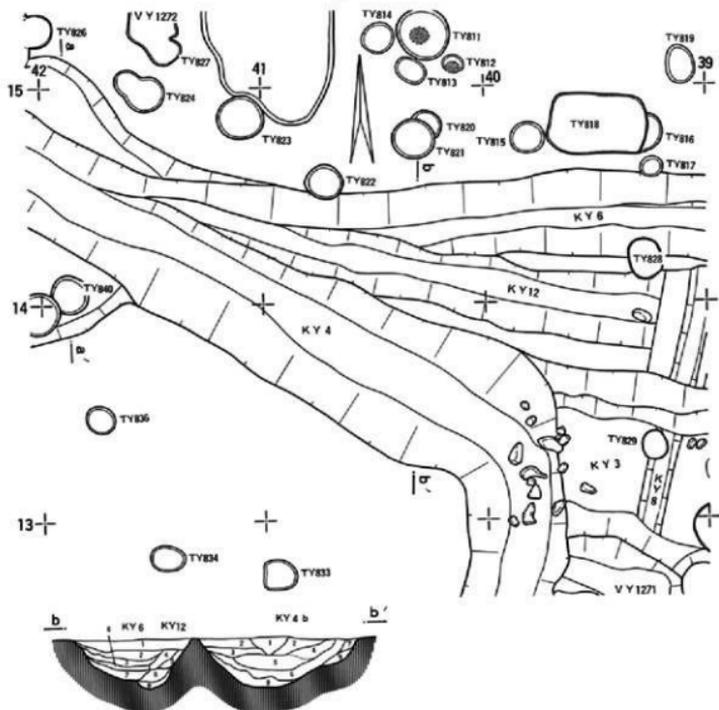


層No	土色	土質	備考
1	黒褐色10Y R 列	シルト	木炭を微量に含む
2	黒褐色10Y R 列	泥質シルト	
3	黒褐色10Y R 列	砂質シルト	
4	暗褐色10Y R 列	シルト	木炭粒を霜降状に含む
KY 6			
1	暗褐色10Y R 列	シルト	
2	黒褐色10Y R 列	泥質シルト	
3	黒褐色10Y R 列	泥質シルト	
4	黒褐色10Y R 列	泥質シルト	木炭粒を霜降状に含む
KY 12			
5	黒褐色10Y R 列	シルト	
6	暗褐色10Y R 列	シルト	木炭粒を少量含む
7	黒褐色10Y R 列	泥質シルト	
8	黒褐色10Y R 列	泥質シルト	
9	黒褐色10Y R 列	泥質	木炭少量含む

第16図 上浅川遺跡第1次調査KY 3, KY 6,
KY 12平面図

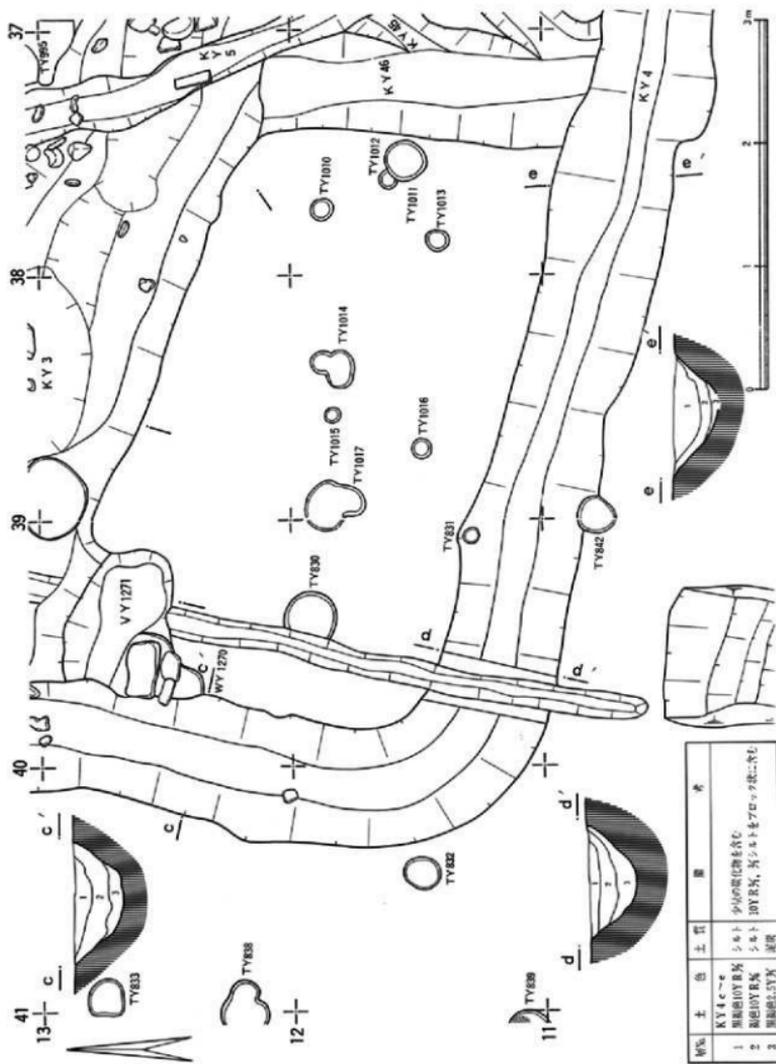


層No	土色	土質	備考	層No	土色	土質	備考
	KY 6				KY 4 b		
1	暗褐色10Y R 5/	シルト	水炭粒を凝降状に含む	1	黒褐色10Y R 5/	シルト	水炭を微量に含む
2	灰黄褐色10Y R 5/	泥質シルト		2	にじみ黄褐色10Y R 5/	シルト	
3	暗褐色10Y R 5/	シルト		3	黒褐色10Y R 5/	粘質シルト	10Y R 5/シルトを凝降状に含む
4	暗褐色5 Y R 5/	泥質シルト		4	にじみ黄褐色10Y R 5/	シルト	
5	褐色7.5 Y R 5/	泥質シルト		5	灰黄褐色10Y R 5/	泥質シルト	10R 5/シルトを少量含む
6	灰黄褐色10Y R 5/	シルト	水炭粒を少量含む	6	黒褐色10R 5/	シルト	水炭粒を多量に含む
7	暗褐色10Y R 5/	シルト		7	黒褐色10Y R 5/	シルト	
8	KY 12			8	黒褐色10Y R 5/	泥質シルト	
9	にじみ黄褐色10Y R 5/	シルト		9	灰黄褐色10Y R 5/	泥質シルト	



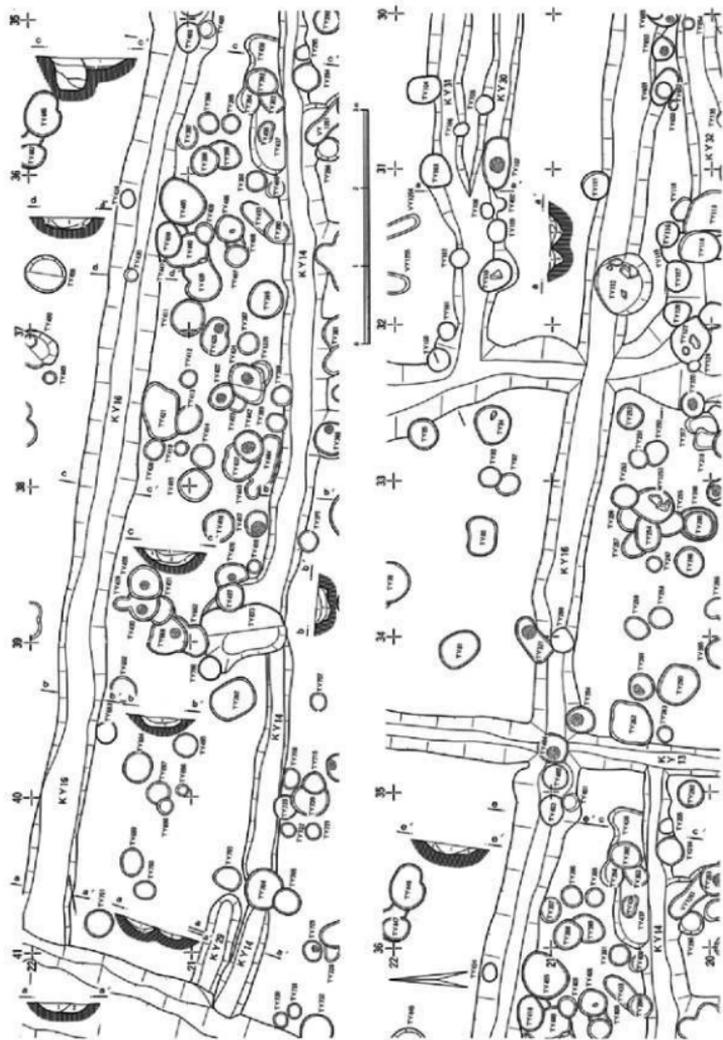
第17図 上浅川遺跡第1次調査KY 4, KY 12平面図



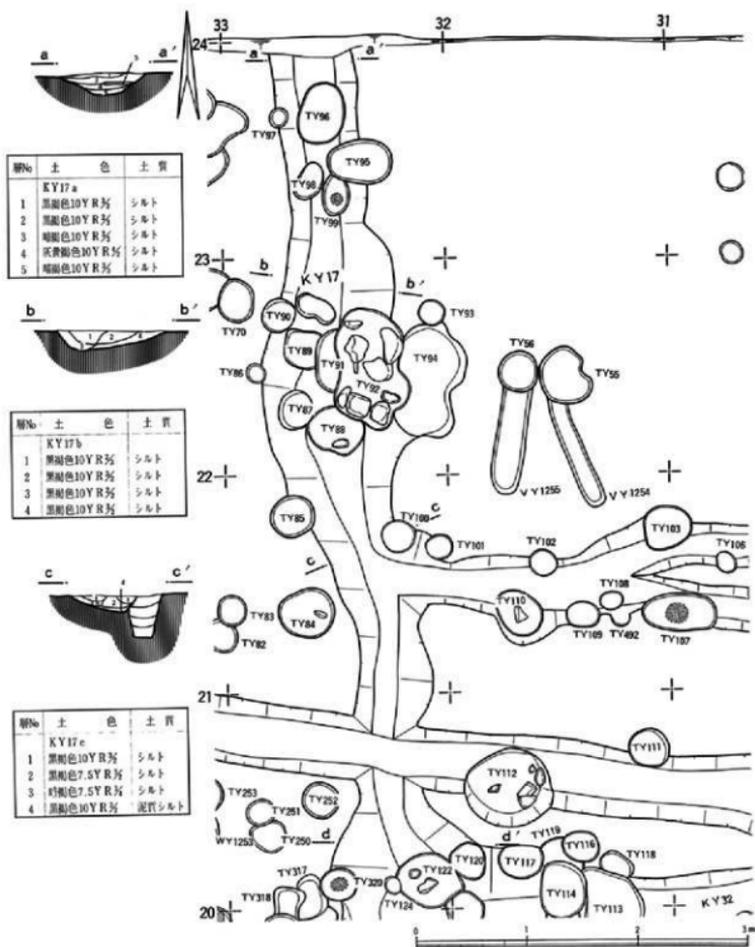


第18図 上淺川遺跡第1次調査KY4平面図

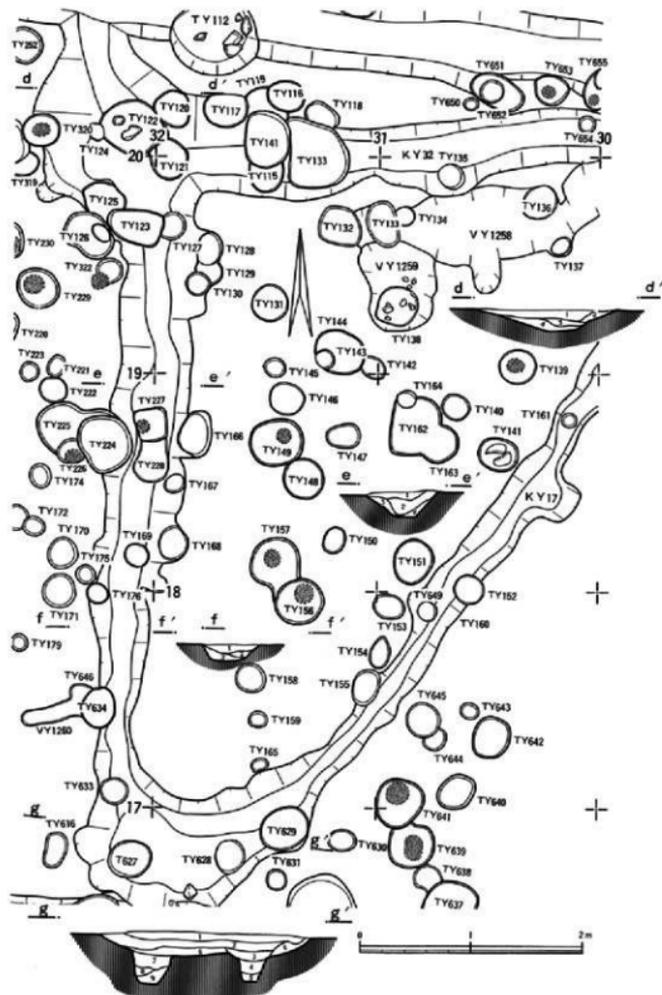
層	土質	土色	層名
1	KY4c~e	シロト	少山の灰化層を含む
2	KY4b	シロト	10YR 8/3, 灰シロトを70%以上含む
3	KY4a	黒	黒色土層



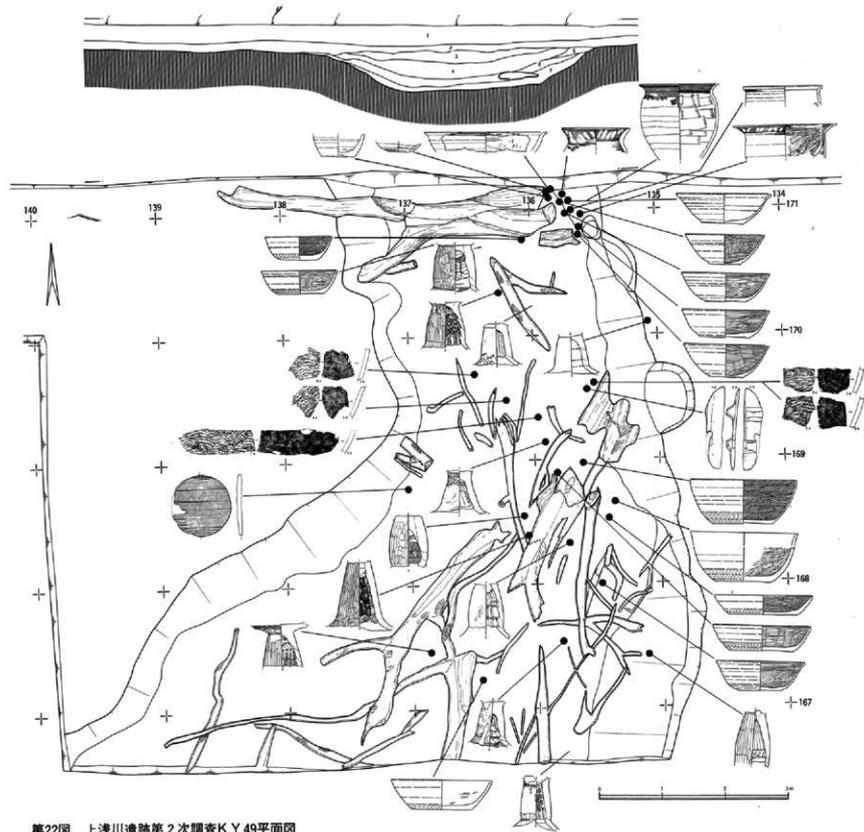
第19図 上流川邊跡第1次調査KY14, KY16, KY29, KY30, KY31平面図



第20図 上浅川遺跡第1次調査KY17平面図(1)



第21図 上浅川遺跡第1次調査K Y 17平面図(2)



第22図 上浅川遺跡第2次調査K Y 49平面図

のピット（VY記号）の17基がある。遺物は存在しなく性格は不明と言わざるを得ない。

2) 2次調査の遺構

遺構の密集範囲、分布状況を得るためにトレンチを配して確認した結果、大形溝状遺構を中心に掘立建物跡の柱穴、竪穴住居跡、土壇等を平面プランで認めることができた。あくまでも平面プランでの検出であるため確実性に問題が残る、今回の報告書で触れることは第3次調査との係わりも考慮し差しひかえたい。なお、北側よりG81～15～221を中心とした範囲、G75～155～160～195を中心とした範囲、G90～155～105～130を中心とした範囲の3箇所が特に遺構が集中する傾向にみられた。今回は遺構の性格を把握するため中間位に位置する溝状遺構を掘り下げることにした。

KY49〔第22図、第15図版〕

南北方向にのびる不整形溝状遺跡で、調査範囲中でのべると、最大幅9.7m、最少幅4.3m、深さ1.2mを計る。溝内の埋土は7枚で第4層から第5層にかけて遺物が検出されている。同じく第5層～第7層には「くり」、「クルミ」、「トチ」等の自然大木が横倒しており、溝上端に土壇状の落ち込みが存在することより、これらの木の一部分が溝縁片に移植していた可能性がある。

遺物は土師器環及び高環を中心に須恵器燻破片とゲタ、曲物、それに多量の種子が検出されている。この中で土師器高環はこの時期には数少なく、器種にもかかわらず意識的に破壊して多量に捨てられていることは注目すべきである。

4 遺物

1次調査は溝状遺構を中心に151点、2次調査は精査区として掘り下げたKY49を中心に250点が検出された。ここでは土器、石器（礫器を含む）木器の順で述べてみる。

1) 1次調査出土の土器〔第23図～第25図、第3図版～第8図版〕

掘立建物及び柱穴集中箇所を除く溝状遺構とその周辺から出土している。時期的には中世期に属するものが大半で、他に縄文時代や奈良、平安の遺物も少量含まれている。

a 群土器—G38～41—14～16にかけて54点検出している。どれも小破片と磨滅のため文様の判別できる資料はなかったがわずかに沈線文と縄文が認められることから、縄文中期末葉の大木10式併行とみられる。おそらく第28図1の石皿も同時の所産と考えられる。

b 群土器〔第23図11～16、第24図4・5〕

須恵器片である。第24図4は蓋、同5は高台環で、前者は8世紀初頭、後者は8世紀末とみられる。第23図11～16は須恵器燻の1部と考えられ、表面に細長い格子目状の叩き目を呈し、内面を同心円のあて痕を示すものが多い。8世紀末～10世紀位の所産とみられる。

c 群土器〔第23図1～10〕

暗赤茶褐色を呈す越前系の燻片である。どれもKY1の覆土とKY12の溝底面からの検出であ

り、2次焼性を受けた痕跡が認められた。15世紀末～16世紀前半と考えられる。

d 群土器〔第24図1～3〕

酸化因焼性を有する土師質土器であり、口縁部内面に内耳取手を有する特徴がある。第24図1は上半位を有するもので、口縁部が外反し胴部から直下する深鉢形をなす。口辺部から口縁部の内面に4単位の内耳取手を有している。外面は口縁部を横位のナベ、胴部を小円隆による叩きを施している。外面全体は真黒に煤が付着していることからナベと考えられる。第24図2・3も同様とみられる。内耳を有するナベの検出は北海道を中心に東北部にかけて2耳取手の鉄ナベの分布がみられるが、土師質で4耳取手を有する土師質の検出は少なく注目されよう。

なお、鉄ナベは15世紀～16世紀頃と云う。おそらく鉄ナベの搬入する前段階のものと考えられるが、類例を待って結論は差し控え14世紀～15世紀頃としておく。

e 群土器〔第24図6～11〕

b群と同様に土師質の土器である。大半が口縁部片であり、外面が多量の煤が付着している。器形的には内曲するもの6・8、外反するもの7・9・10とがあるが全体的には大形の鉢形を呈するものとみられる。用途はおそらくナベで、破片を図化したことから中には内取を有するものも含まれる公算が強い。

f 類土器〔第25図1・2〕

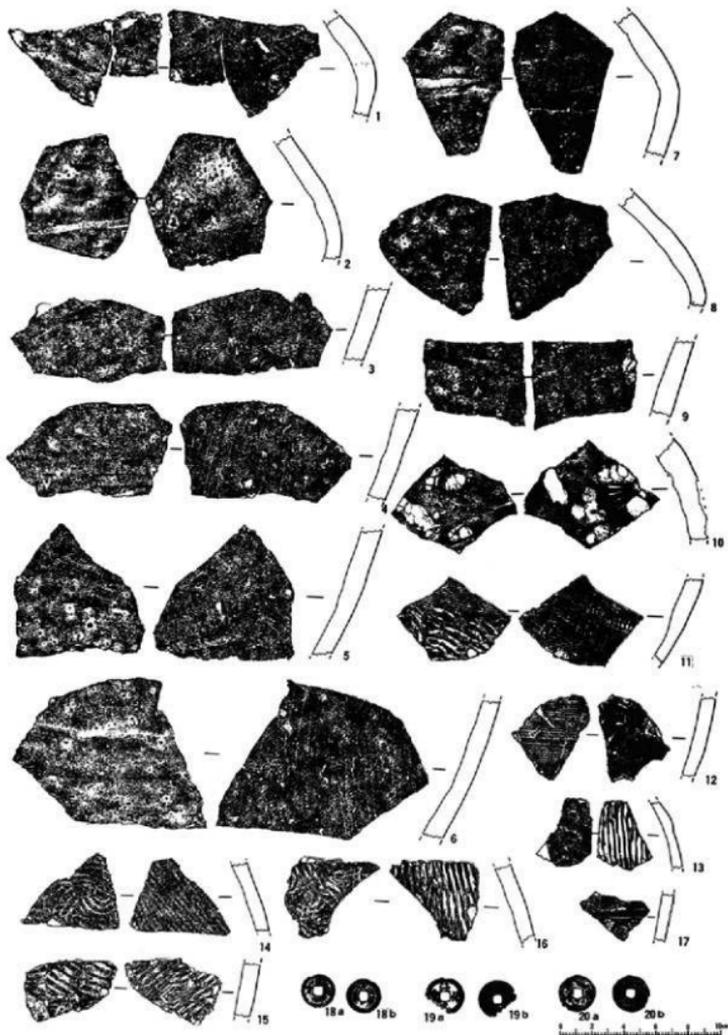
括鉢である。ただし酸化因焼性を有するもので、土師質を呈し機能的にはナベや鉢に用いたものとみられる。年代は13世紀～14世紀頃とみたい。

2) 2次調査の土器〔第25図3～12, 第31図1～6, 第34図1～5, 第35図, 第36図〕

KY49の溝状遺構内から検出されたものである。遺物は前にも触れた様に第5層～第7層より認められたものであり、年代的な相異が若干認められる。ただ今回はあくまでも第3次調査の予備調査であり、土器の細部に亘る分析は第3次調査と合せて行うことにして、ここでは簡単に述べるにとどめておく。土器はすべて8世紀に求められるもので次の8類に分類される。

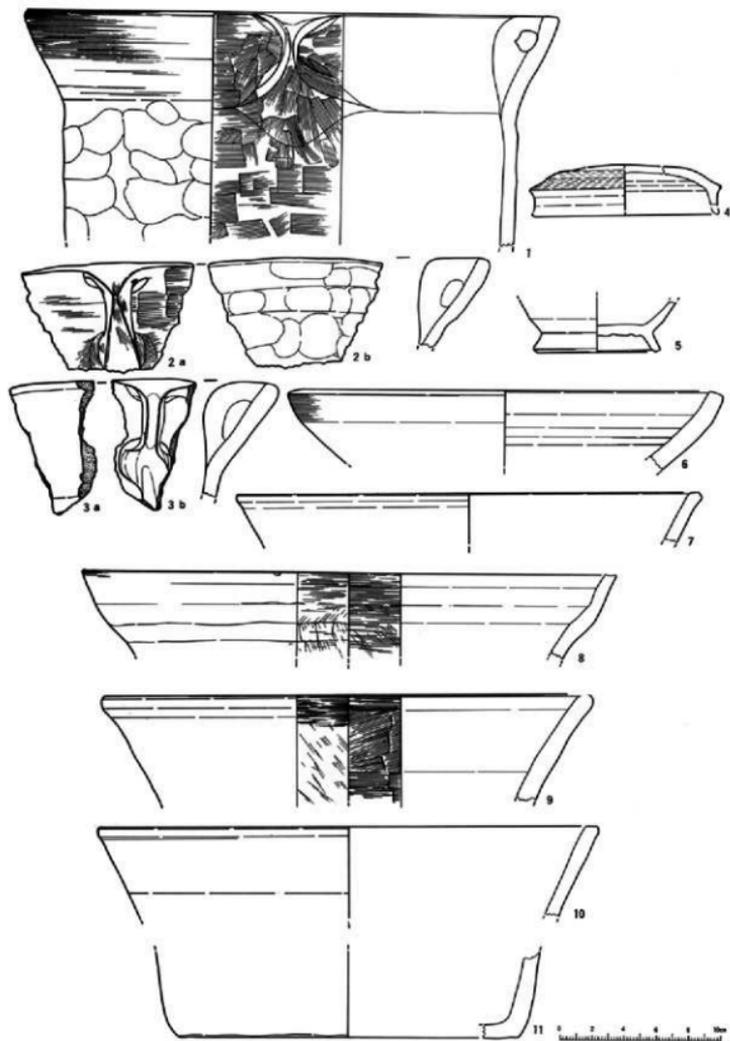
a 類土器〔第35図1～13〕

土師器環を一括した。内面を黒炭化処理を行なった所謂内黒を呈するものであり、内面は明瞭なヘラミガキを施している。底部切り離しは回転ヘラ切りを有するもの1～3・10・11と糸列り、同ヘラケズリ調整を有するもの4・6・9・12・13それに手持ちヘラケズリを有するもの5・7・8の3者がある。器形的には笹原A群2類に比例するもの1・2、A群5類に比例するもの3・9・10、A群4類に比例するもの4～6と笹原には存在しない4類的でありながら底部の小さいグループ7・8、大形の環で器高が高く底面の広いもの11・13がある。外面調整は水引口ロ口成形によるものであるか底辺にかけて回転ヘラケズリを有する1・2・9～11・13がある。12は取手付環である。年代的には笹原Ⅱ期～Ⅲ期、すなわち8世紀中葉～同末葉に位置するものと考え

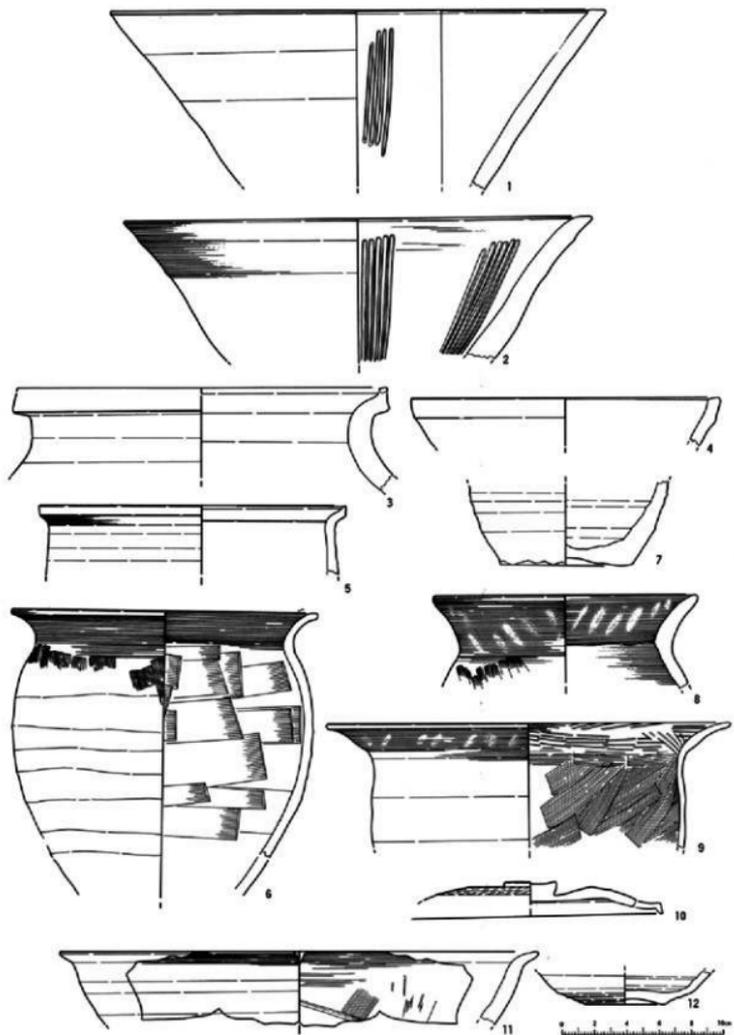


第23図 上浅川遺跡第1次調査出土土器拓影図

KY 出土 7~10, 13~15, KY 12 出土 1~6, KY 14 出土 16,
KY 16 出土 12~18, KY 2 出土 17~19, G 40~20 出土 11・20・16



第24図 上浅川遺跡第1次調査出土土器実測図 KY 1出土4, KY 2出土1, KY 9出土7, KY 18出土5,
KY 25出土2・3・10・11, KY 3出土6・8・9



第25図 上流川遺跡第1次，2次調査
出土土器実測図

1次調査 KY21出土1・2，KY3出土4，KY17出土3
2次調査 KY49出土5～9，11・12，G120～125出土10

ることができる。

b 類土器〔第35図14〕

赤焼土器1点がある。口辺部がわずかに外反し、そのままゆるやかに外曲を示めしながら底部へと向う。器高は比較的高く、底部切り離しは糸切り無調整であり底面は小さい。

c 類土器〔第36図1～13・第31図1～6〕

土師器の高環を一括する。すべて脚と環を意図的に破損しており、本類の完形土器はない。今回図化したものは19点であるが、小破片も含めると計27点があり、中でも脚部片がきわだって多く認められる。完形品が含まれていないので全体的な形状は不明であるが、脚の形態から次の5類に分類することが可能である。

①細長く弓状に張るもの1～4、②脚部が短く環部接合部から底辺にかけて大きく開くもの5～7、直線的にふくらみを持ち脚部の短いもの8・9、④環接合部から斜位に細長く広がりをみせるもの10・11、⑤脚部が円柱状を示すもの12・13となる。次に環部であるが6点ある。何れも強く外側に開き中央部に一条の段を有するのが特徴である。高環は笹原遺跡にも少数認められるが、上浅川遺跡出土と同様な器形を有するものはなく不自然である。なお、本類土器の意図的な破損状況を知るために第38図に模式図を作成した。これによると環部、脚部が存在するのに対して底辺部の破損品が含まれないことに気づく、この点は第3次調査の課題にしておこう。

d 類土器〔第25図5～9〕

土師器袋形土器を一括した。5点あり口縁部が「く」の字状に外反し、胴部が丸味をもつもの6・8、同じく外反するが胴部が直下するもの9、小さく外曲し胴部の直下するもの5の3形態と底部1点7がある。調整は外部を水引きロクロ成形、ナデ、ハケ目を施こし内面はナデ、ヘラナデ、ハケメをなす。

e 類土器〔第25図11〕

ナベ1点がある。口唇部が尖状を示め外反し、胴部が斜傾するものであり、外面をロクロ及びナデ、内面をナデで成形している。

f 類土器〔第25図10〕

G120—125等Ⅲ層から検出された須恵器蓋である。笹原のB群2類に相当する。

g 類土器〔第25図12〕

須恵器環の底部片であり、糸切り無調整の底部切り離しを有し底面が小さくやや上げ底風をなす。この底面には「正」の墨書が認められた。笹原A群17類に比定される。

h 類土器〔第34図1～5〕

須恵器の袋形土器の破片を一括する。外反に格子目状の叩き目を呈し、内面に半円状のあて痕を有する。

3) 礫

第1次調査の遺構を中心に総数473点検出され、これらの礫群は欠損面や二次焼成を有するものが大半である。出土状況は、溝状遺構KY1～KY48の覆土や最下層と、柱穴内からであり、溝状遺構が密集する東側に分布している特徴がみられた。したがって、遺構と礫は、密接な関係を有するものと思われる。

出土した礫を大別すると、石臼5点、砥石13点、石製品4点、磨石20点、石皿1点、凹石1点整形面を有する礫23点、自然礫406点であった。なお第2次調査区より出土した石器群については、第3次調査の報告書で詳細を述べ、今回は実測図〔第30図〕のみに留めておきたい。

a 石臼〔第26図1～5、第9図版〕

石材に粒子の粗い、凝灰岩、砂岩を選択し鉢型に整形したものであり、形状の吟味から3形態に細別される。a'類は最大径が口径部に位置するタイプ1、2、全体的に丸味を帯び胴部に最大径を有すa''類の4、典型的な鉢型を呈す3、5に分類される。

用途としては、穀物の精米の際に使用した容器と理解され、また、今回の調査区に分布する溝状遺構等や出土した状況から考慮すると、小規模な水車を用いた作業を実施していたと想定できよう。年代は13世紀～14世紀の範疇に含まれるものとみられる。

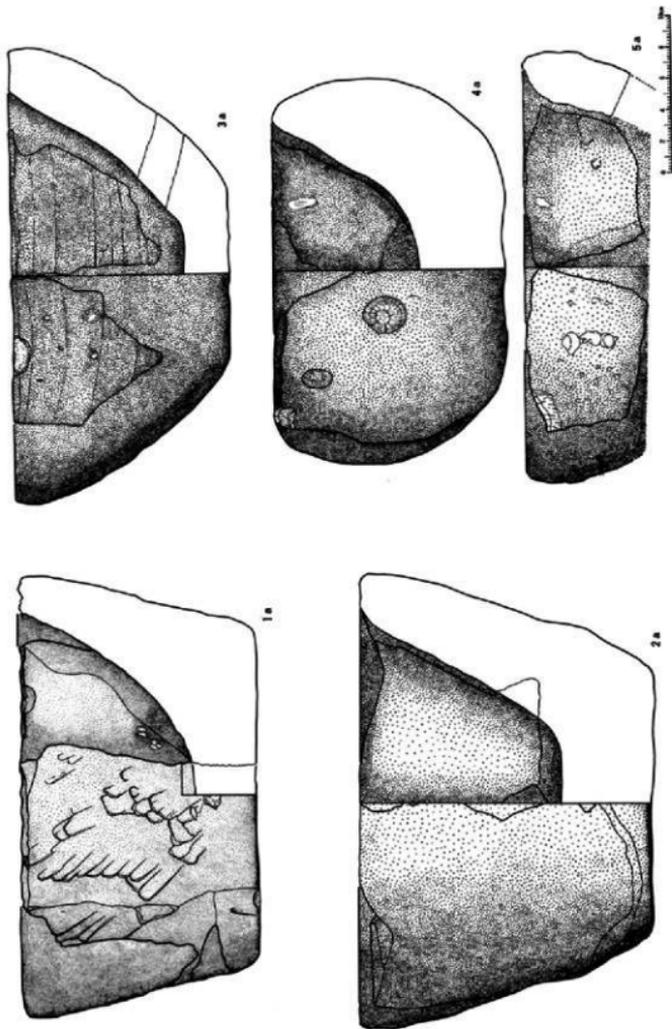
b 砥石〔第27図3、5、6、7、9、10、第29図1～3、5、6、第29図17、第10図版〕

最大のもので長さ15cm、幅5.7cm、厚さ4.5cm、最小で長さ7.5cm、幅2.5cm、厚さ1.5cmの長方形を呈す。石材は、粘板岩や、緑色泥岩を使用し、全面を研磨によって整形しているb'類、第27図の3、5、6、7、9、10と作業面だけを整形したb''類、第29図1、2、3、5、6、17の2者に区別させる。両者共も次の特徴がある。まず素材となる泥岩を戸塚山東山麓より調達していること、次に作業面に無数の刻線を有することである。年代的には、把握が困難であり結論はさけたいが、二次焼成を受けいる点から、13世紀以降に位置づけられる。

c 石製品〔第27図1、2、4、8、第30図1、第10図版〕

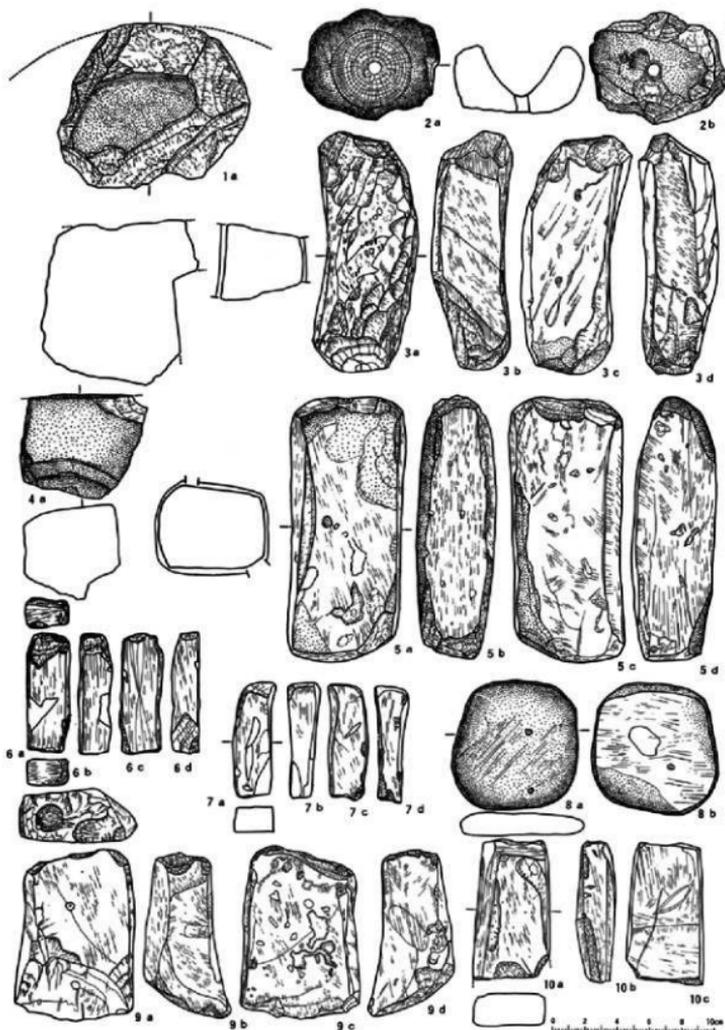
KY1の最下層より出土した第30図1は、白色の泥岩を素材に用い表裏面から研磨を加え正方形の角を取った五角形状に整形され、上端部の中央に両面より穿孔し、貫通した孔がある。各位の寸法は長さ3.8cm、幅3.8cm、孔は、上場で0.5cm、下場で0.4cmを計る。表裏面に縦長の刻線が観察されるが、意図的な表現とは考えにくい。同様な形態を有する石製品は、米沢市万世町桑山のNo.4遺跡から昭和55年に1点検出されている。ちなみにこの石製品には、刻線による髭目の顔を表面に置き、裏面に兎が描かれている。年代は10世紀の遺物である。今回出土の石製品は、13世紀に位置づけたい。

第27図2は、砂岩を素材とし、長さ8.4cm、幅6.9cm、厚さは6.9cmを計り、平坦な面とやや外湾する面を整形している。平坦な面には、上端部で直径5cmの円錐状の凹部を有し、深さは3.5cmを



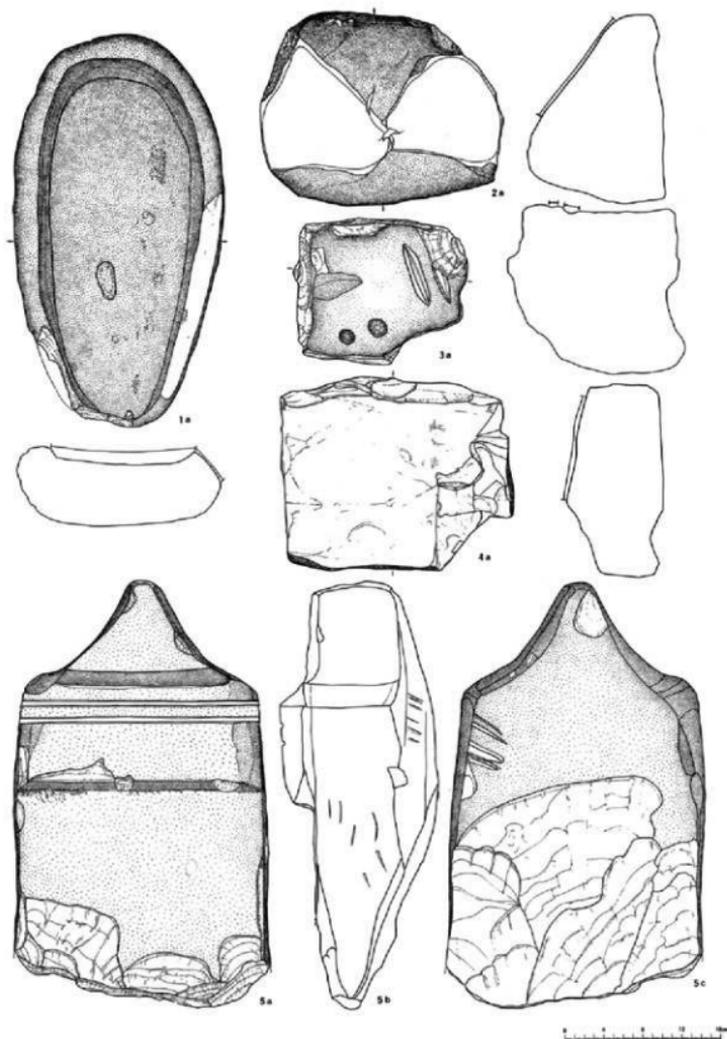
第26図 上浅川遺跡第1次調査
出土石臼実測図

KY1出土3, KY2出土1, KY4出土5, KY25出土2
KY21出土4

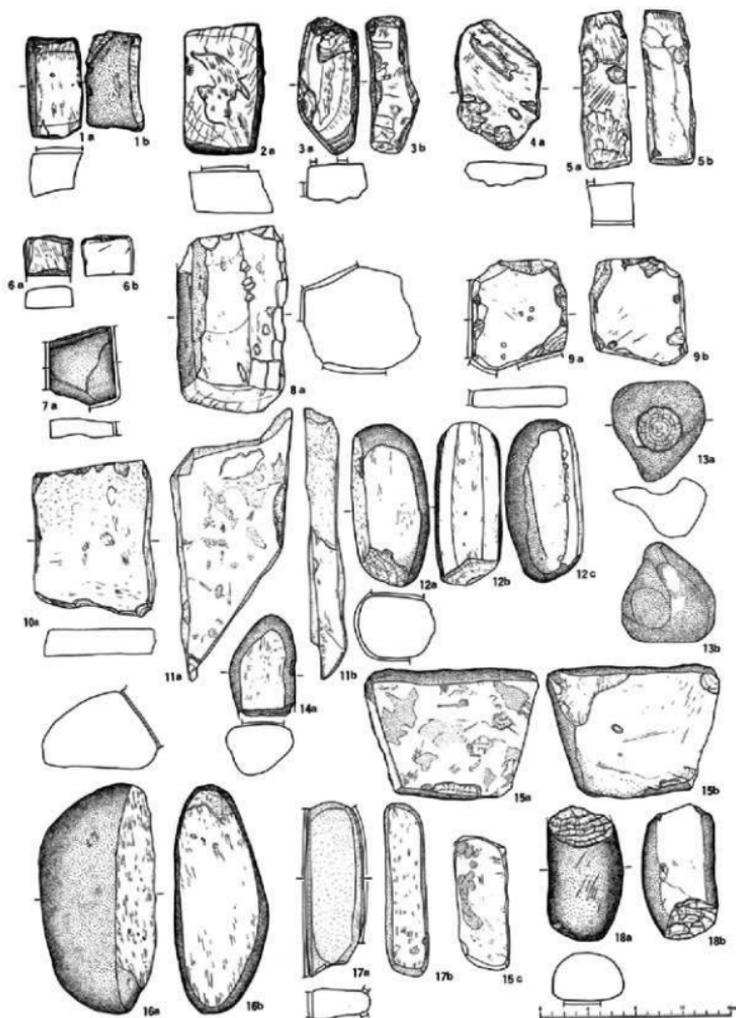


第27図 上浅川遺跡第1次調査出土土器実測図

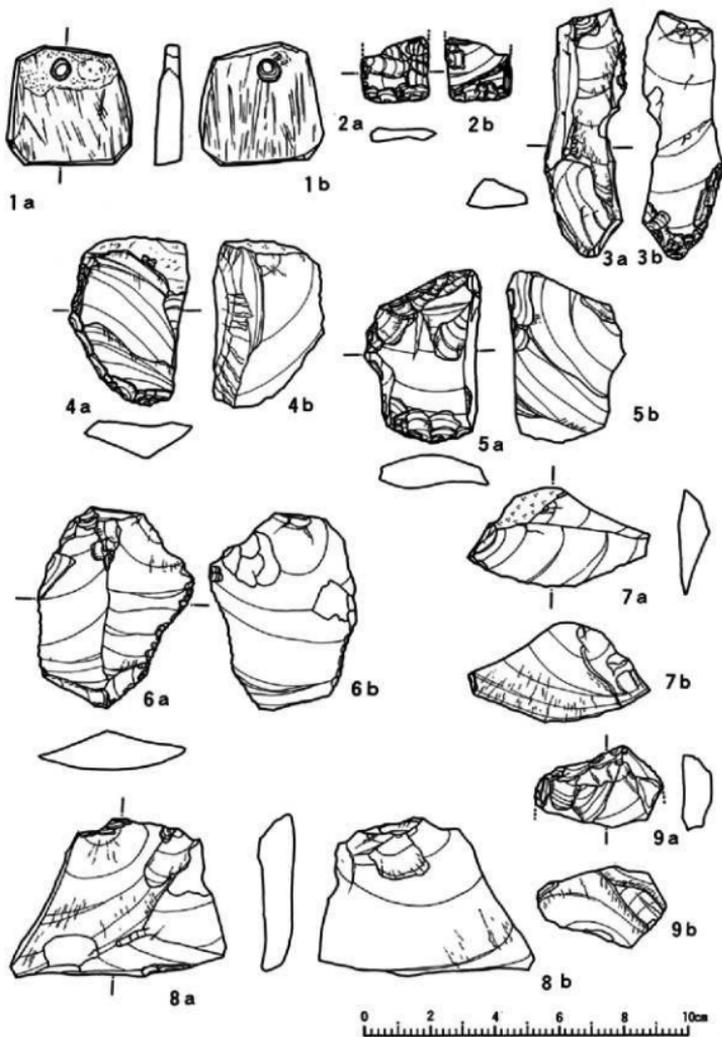
KY1出土2・4・6~8・10
 KY2出土1・3・5・9



第28図 上浅川遺跡第1次調査出土燧実測図 KY 3出土5, KY 36出土4, WY 92出土2・3, WY 715出土1



第29図 上浅川遺跡第1次調査出土燧石実測図 K Y出土1・4~9, K Y 2出土16, K Y 12出土11, W Y 122出土3・17
 K Y 19出土2・12, W Y 50出土13, W Y 92出土18, W Y 1232出土14・15
 W Y 1252出土10



第30圖 上浅川遺跡第1・2次調査出土燧石、石器実測図

なし、底部に径1cmの有穴を持つ石製品である。用途は不明である。KY1北側の覆土より出土している。第27図1は、有段を呈する破片で玄武岩を使用し、整形を加えたものであり五輪塔の1部と判断したい。KY1の覆土より出土。第27図4は、⁵白の破片と思われる。

d 磨石〔第28図2～4、第29図4、7～12、14～16、18〕

出土した礫群の中で最も多く検出された。代表的形態を有す13点について説明を加える。素形の形態から次の3類に分けられる。d¹類は第29図12、14、16、18があり、いずれも安山岩を使用し1面～3面の磨面を有するものであり縄文時代の遺物といえよう。なお本遺跡の調査区より磨滅した縄文土器が出土している。d²類としては、第28図2、3、4があり大形の礫を選択して片面だけを使用しているものが多い。石材としては、玄武岩、凝灰岩がある。d³類は第29図4、7、8、9、10、11、15があり、砾石と同様に戸塚山東山麓の泥岩を使用しているものが主で、磨面は何れも長期間に亘って使用された痕跡はなく刻線を有す。

e 石皿〔第28図1〕

KY4が、KY2と交差する地点より作業面を下にして検出された。安山岩を素材に全長41.5cmある。凹部が明瞭な楕円形状を呈し、凹部の深さは1.3cmある。縁辺と底部に磨面を有し、若干の欠損面を持ち、地上に出ている底面が焼成を受けている。d¹類と同様に縄文時代中期の所産とみられ後世になって溝が活用された時代に関止用の礫として再利用されたものである。

f 凹石〔第29図13〕

WY50より1点検出されている。三角形の自然礫の中央に深さ1.5cm、直径3.9cmの「U」字形の凹を有すものであり、縄文時代の凹石とは相違点が認められる。

g 整形面を有する礫

WY1215、1231～1234、1238、1240～1242からの検出である。軽石凝灰岩を石材に使用し、方形に整形を加えた調整面を有し、現長で長さ20cm～50cm、幅20cm～40cm、厚さ5cm～12cmを計る。これらの礫群は風化が激しく、欠損面を呈すものが多く認められ、二次焼成面は茶褐色や灰黒褐色をなす。軽石凝灰岩性の母岩は、本遺跡の東側一帯の山麓に分布している。

礫の多くは、建物の礎石として利用されたものであり、年代は伴出遺物から想定し15世紀以降とみられる。

h 焼成面を有する礫

前述した様に、検出された礫群の大半が二次焼成を受けているが、ここで説明するのは全面が黒色を呈する二次焼成面を特徴とするものであり、10cm～15cmの河原石の形態を有す。

この礫群は、調査区の北東部に集中する分布状況を有すものでTY88、92、110、112、225、277、WY29、30、31、37、44、50、84、141、1241、1243、1248と、KY1、2、11、19、22、24に限定できる。建物の柱を構築する際に利用したものと考えられる。年代は、整形面を有する

磯群より下降する13世紀以降であろう。

i 板碑〔第28図5、第9図版〕

KY 3の覆土より発見された。現長で44.5cm、幅26.2cm、最大厚さ15.6cmあり、欠損面を有し特に裏面の3分の2が欠損面で占められる。石材に凝灰岩を選択し、外形状は長方形と三角形が合体した形態を有し、首部、額、塔身部で構成された碑である。

首部の頂角は、先端がゆるやかなカーブを描いた突起部を呈し、額の上部に幅0.5cm、深さ0.2cmの刻線を1cm間隔で2本配す。塔身部と額の境は、2.5cmあり平坦な面には刻線などによる文字や文様は観されない。この仏塔は当初、別な場所に立っていたものを本遺跡が活動していた時期に出土地点まで搬入し、再利用されたものと言えよう。

4) 木器

第1、2次調査区の溝状遺構内を中心に総数で56点出土している。また、これらの遺物とともに自然流木、種子類も多量に検出された。特に、第2次調査区の第22図KY 49の実測図からもわかる様に大形の形状を有す自然流木群は、第3次調査によって、更に出土量が増加する事は確定した。なお次に述べるKY 1～3、BY 1～12は第1次調査区内の遺構である。

出土状況は、KY 1～3、25、49の覆土、最下層とBY 1～12の柱穴群からの出土であり、いづれの遺構も湧水を有し、いわゆる水づけの状態によって遺物が保存されていたのである。出土数はKY 1が最も多く30点、KY 2出土5点、KY 3出土4点、KY 25出土6点、KY 49出土4点、BY 1～12の柱穴内からは7点であった。

第1次調査区内より出土した木器群を大別し列举すると、木偶状人形1点、絵馬2点、木椀1点、木鉢1点、曲げ物破片3点、板状木製品9点、杭22点、割木4点、柱根7点となる。第2次調査区内からは、下駄1点、曲げもの底部1点、板状木製品2点、杭2点であった。以下、各木器の説明に入るが、紙面の都合上簡単に述べたい。

a 木偶状人形〔第37図9、第12図版〕

丸棒状に整形された檜材を用い、鋭利な小刀で男性の人面を造作した後に、墨で頭部と目、鼻、口、髭を表現したものである。現長は長さ7.9cm、厚さ1.8cmを計り、頭部は3.7cmある。頭部の黒く塗り上げた部分は立烏帽子を表わしているものと理解され、窪んだ目、髭鬚は古代蝦夷の風貌を連想させる要素を呈す。

ここで、注意したいのは、意図的に刻み付けられた欠損面を有す事であり、呪術的要素を持つ遺物である。誰が、何の目的で製作したのかは、現在の段階では不明と言わざるをえないが年代的には13世紀以降の遺物である。後述する完形の絵馬も同地区のKY 1最下層出土であった。

b 絵馬〔第37図8、第34図6、第12図版〕

完成品と欠損品があり、前者はKY 1、後者はKY 25の最下層の出土であり、両者とも檜材を

使用している。KY 1 の出土品は、長さ20.5cm、幅10cm、厚さは底部が0.6cm、面取りを有す上部は0.4cmを計り、直径0.3cmと0.1cmの貫通した穴が0.2cm間隔で配置されている。表裏面とも平坦に整形され、無数の刻線が斜め方向に多く認められる。なお黒痕は観察されなかった。形状が完形品にもかかわらず、何も描かれていないのが不自然である。

欠損面を有する絵馬は現長で長さ9.5cm、幅5.7cm、厚さは上部で2.5cm、下部で0.3cmある。全体の形態から判断して3分の1が欠損しているものと考えたい。また欠損面の観察により、意図的に折られたものであり、木偶状人形の欠損面と類似する。表面には、一見、隈取りを思い浮かべるタッチの黒書きが描かれているが、全容が不明であり、明言はさけ後日の課題としたい。

年代は、KY 25の遺構最下層より8世紀の土器が1点出土しているが、この遺物がその時代まで以降するものとは断定できない。また、KY 1の絵馬と共存するものとは考えにくく、時間的な差があるものと理解され、総合的に判断して13世紀としておく。性格的には木偶状人形と同様な意味を持つものと思われる。2枚に折れた後に投棄されたものであろう。

e 木碗【第37図】

形成品であり、KY 2のコーナー部覆土より伏せた状態で発見された。口径16.6cm、底部6.6cm、高さ4.2cmの高台杯木碗である。全面が漆塗りによって仕上げられ、外面は黒漆、内面は朱漆を施したもので、調整痕が観察される胴部中央には、植物の葉と花を型取ったと思われる文様が朱漆で描かれている。このような木碗は、一般民衆が使用する食器ではないことを暗示している。この遺物は覆土からの出土であり、14世紀～15世紀に位置づけたい。

d 木鉢【第33図6】

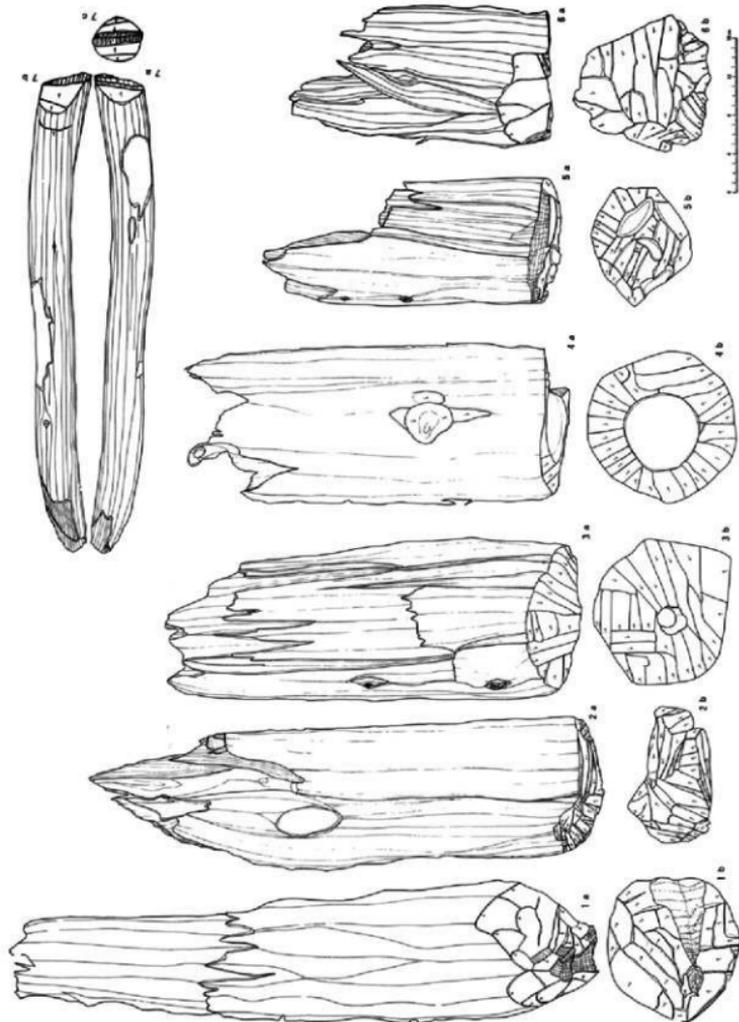
樺材を用材に用い、整形した大形の木鉢である。出土した当初より腐蝕が激しく、さらに焼成によって3分の2がすでに欠損しているが、残存している器形から復元することが可能であり第33図に示した。各位の寸法は、口径49.6cm、底部の径37.7cm、高さは10.4cmを計る。KY 1の覆土より破片になって出土していることから、廃棄されたものであろう。

e 下駄【第34図8、第21図版】

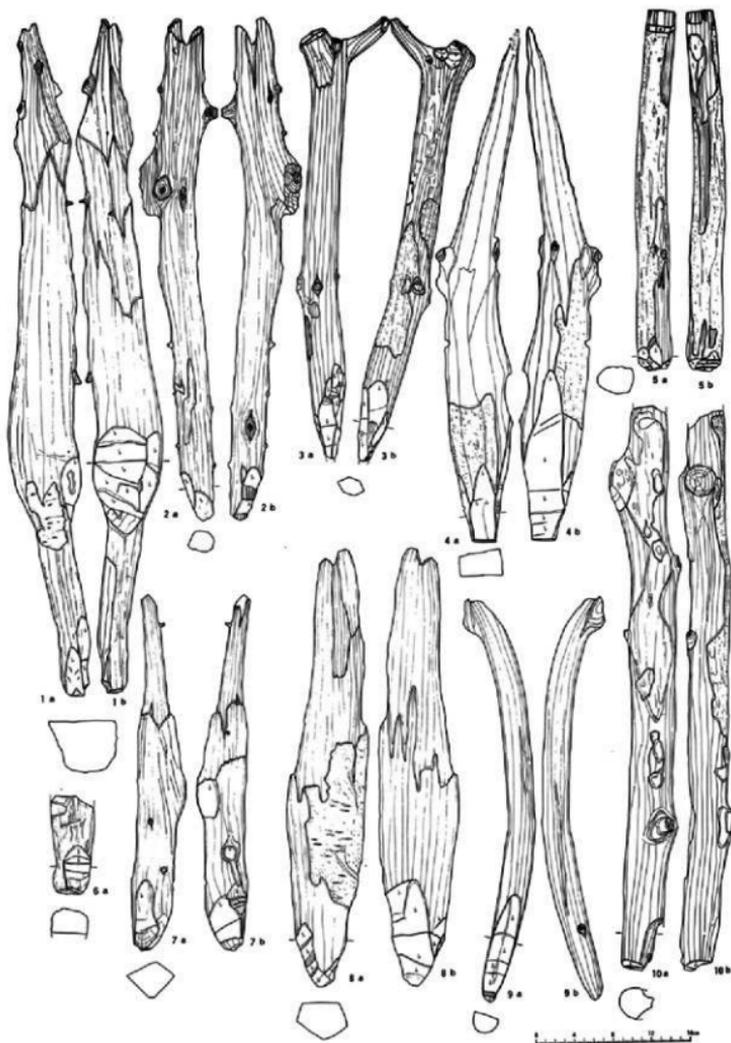
檜材を使用し、角の取れた丸下駄に仕上げられ、現長の最大長さは19.7cm、最大幅は中央部に求められ4.4cm、厚さ0.8cm、下駄歯の部分は2.7cmと1.9cmを計る。鼻緒の穴は1.5cmであり楕円形を呈す。完形品の約3分の1が現存しているものと理解され、第34図に復元図を示した。スクリントン部分が欠損している部分を表わす。

復元図に示した鼻緒の位置に関しては、前述した現存する鼻緒の穴の観察により、下駄の使用方向が理解され、さらに使用方向と考えた前方部の下駄の歯が薄いことなどから判断して、作図した。形状形態の吟味によりこの下駄は、女性用、左足の丸下駄である。年代は8世紀末。

f 曲げ物【第34図7、第21図版】

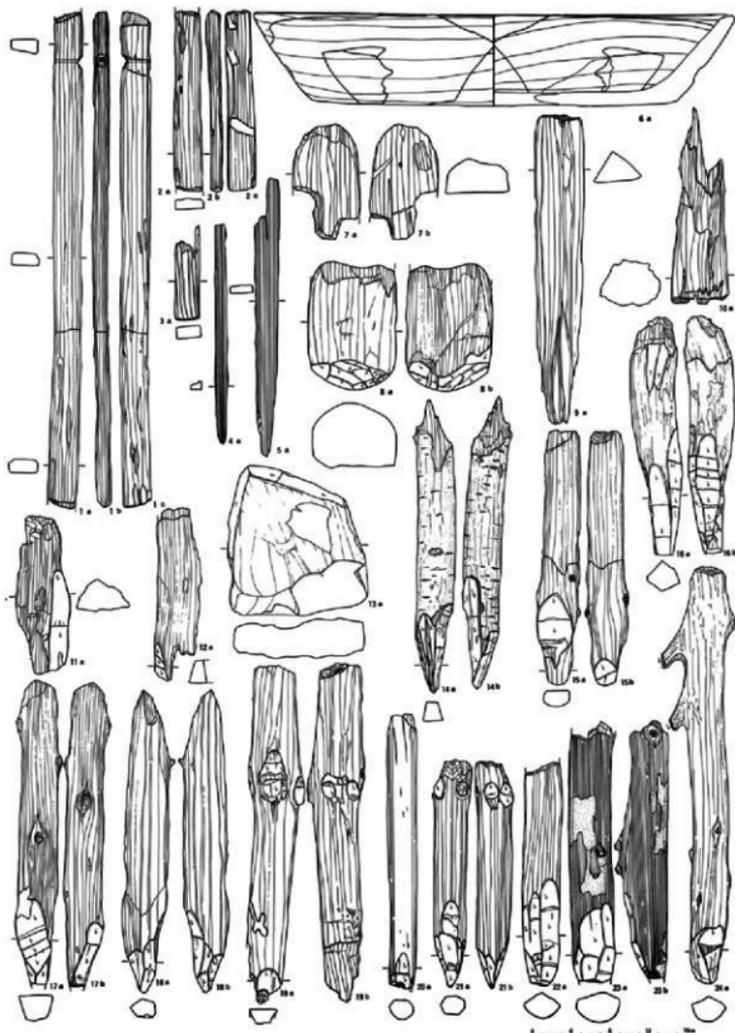


第31図 上浅川遺跡第1次調査出土木器実測図
 KY1出土7, TY1275出土1, TY142出土2, TY594出土3
 TY225出土4, TY196出土5, TY602出土6



第32図 上浅川遺跡第1次調査出土木器実測図

KY 1出土1・2・3・6~10, KY 25出土5,
 WY 1237出土4



第33図 上浅川遺跡第1次・2次調査出土木器実測図

TY 226出土-10, TY 180出土-20
 KY 1出土 1・2・6・9・12-14・15-17-18-19-21-23-24
 KY 2出土 3・4, KY 25出土 7・8・11-16-22, KY 49出土 13

第1次調査区のKY1の最下層より出土している。すべて破片で占められ、形態は薄片に整形され、底部と判明しているのが1点、他は不明である。第2次調査区のKY49の出土品は底部の形態を有し、直径14.9cm、厚さは1cmあり、外縁にはかすかに段が認められる。

g 板状の木製品【第33図1～5】

第33図1のKY1出土が注目される。現長での長さが52.5cm、幅3cm、厚さは1.5あり断面が台形状を呈す。上端より4.6cmの位置に幅1.9cm、深さ0.4cmの「U」字形の凹部を整形し、さらに凹部中央には直径0.2cmの有穴を持つ。用途としては機械に関連する部品としておきたい。檜材使用。

他は、長さ27.5cm～19cm、幅2.8cm～5.3cm、厚さは平均1.2cmであり、檜材、杉材を使用している。断面形態は長方形を有するものが多く認められる。【第33図2、3、4、5】

h 杭、割木【第31図7、第33図11、12、14～24、第32図1～10】

木器の中では、最も多く検出され、KY1、2、25出土が大多数を占める。出土状況は、これらの遺構の最下層面に杭列を呈して認められ、割り木を横に付随して置く形態を有す。現存している杭の部分の大半は、土の中に入っていたものであり、地上部はすでに腐蝕していた。

これらの杭群に使用された用材は、檜材が多く、次いでウワミズクラ（通称メクラの木）であった。削り面は、全面削りと片面削りによって尖状的に整形されている。削り面の形態としては、全面削りの方が多い。実測図で示した「→」の方向は削り方向を表わし、切合関係が判る様に作図したので、詳細については、こちらを参照願いたい。

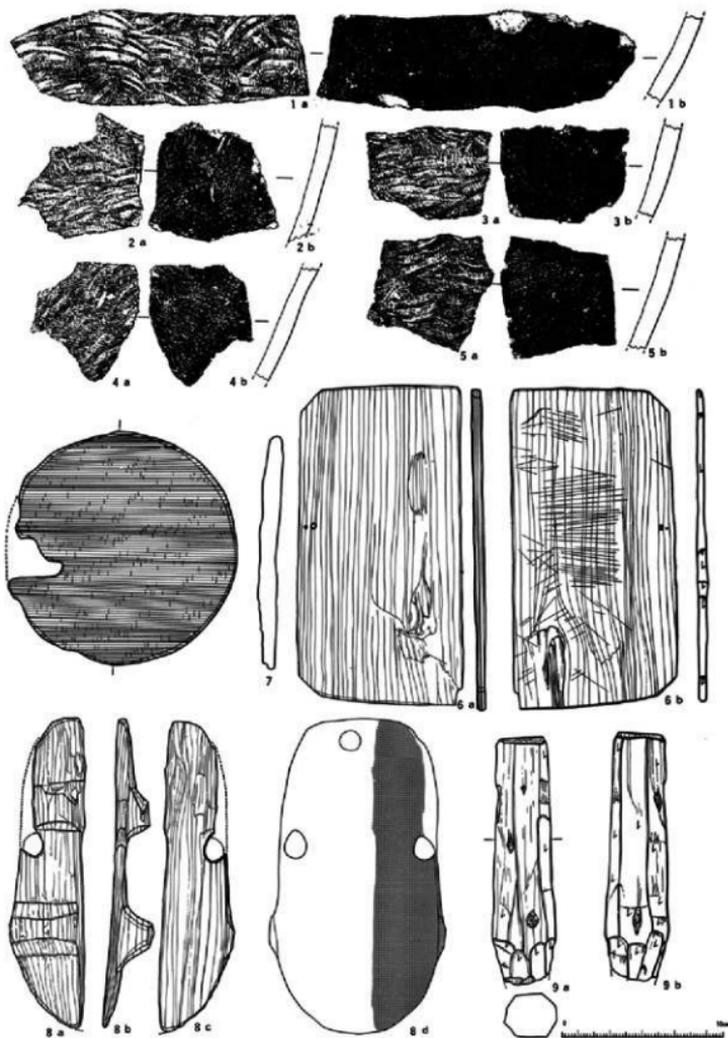
杭群の大半は、焼成を受けた痕跡を有するものが認められる。しかし、地上部分に集中することから、強度を意識したものではなく、むしろ時間的相違を有する焼成と言えよう。ちなみに尖状部に対しての焼成は観察されなかった。割木は、最大のもので長さ83cm、厚さ13cmであり、断面は三角状を呈す。材質は、黒く変化しており不明である。

i 柱根【第31図1～6、第33図10、第12図版】

檜材を使用し、根元部分に整形面を有するものであり、外形はBY3の割木を除き竈地より伐採した形態を呈す。整形面に2種類の工具が使用されその相違は明確に残されている。第31図1は、幅の広い木工具を使用し両面から調整を加え、中央部に折れ面を有す。第31図2～6は幅は1.5cm位の工具で縦長の削り面を有す特徴が認められる。前者の整形面形態はやや尖状を呈すのに対して、他は平坦に仕上げられている。

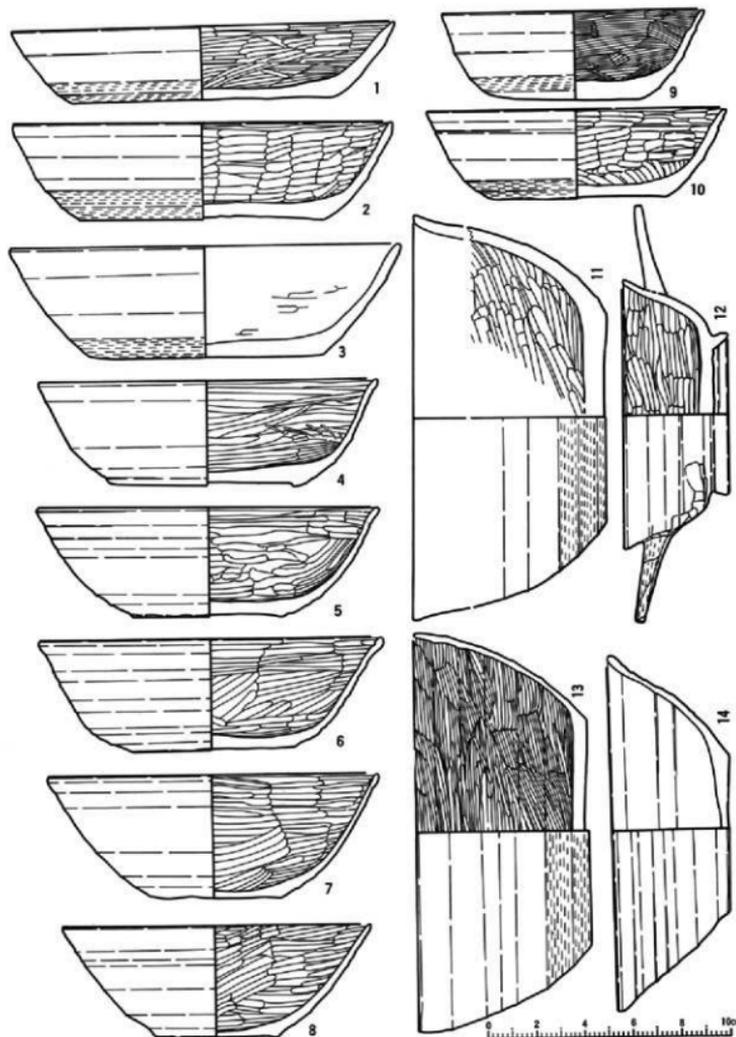
j 植物遺体

出土した種子は、整理箱で3箱に達した。種子名を列挙するとカワラスモモ、モモ、ウメ、クルミ、ドングリ、クリ、トチ、ウリ類がある。これらの中で、最も多いのがカワラスモモであり、次いでKY49のトチの実が上げられる。また木桶が出土したKY2のコーナー部よりウメの実が集中して検出された。これらの遺物は祭祀の際に使用された可能性を有す。



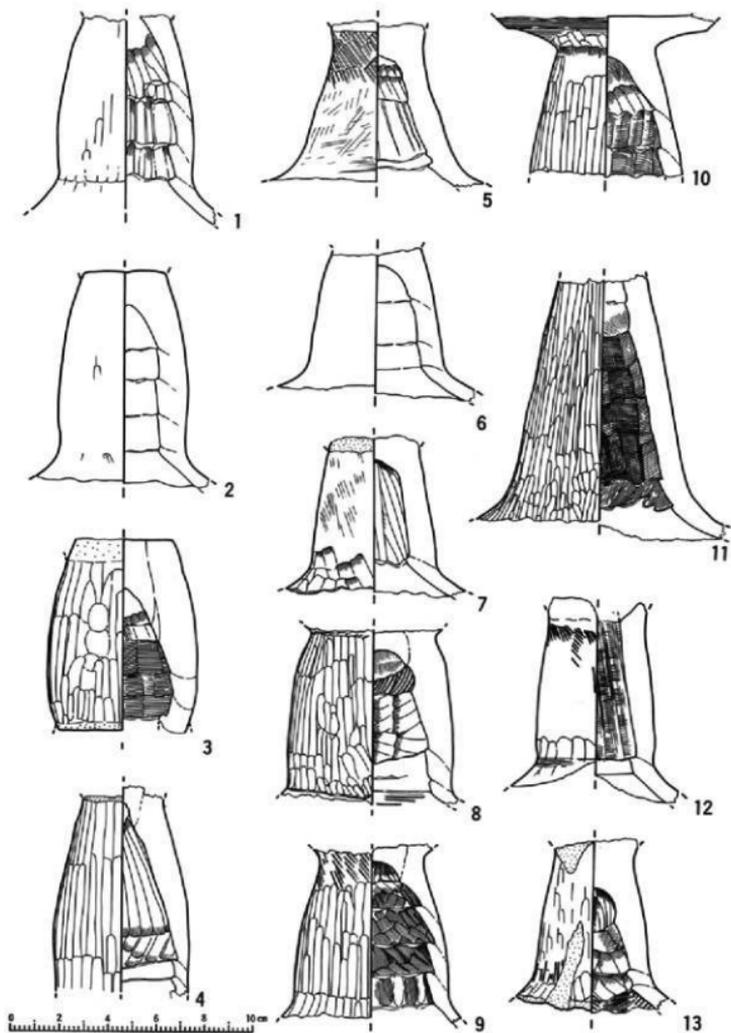
第34图 上浅川遺跡第2次調査出土土器拓影図, 第1次, 2次調査出土土器実測図

1次調査KY1出土6, 2次調査KY49出土1-5, 7-9



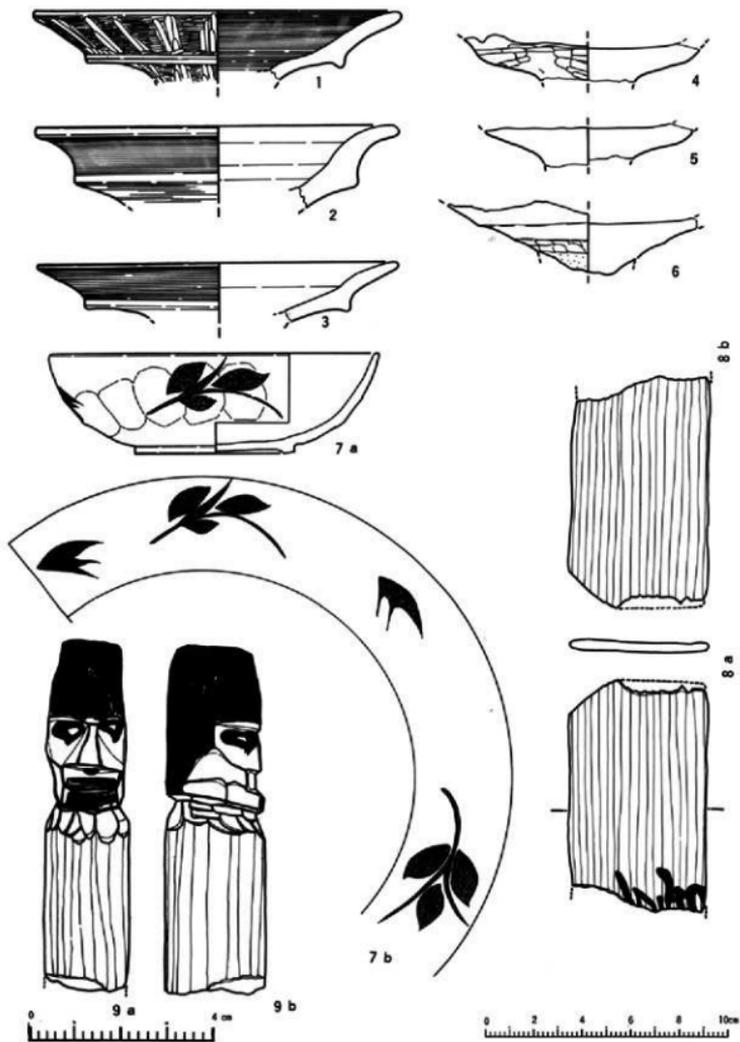
第35図 上浅川遺跡第2次調査出土土器実測図

KY 49出土 1~14



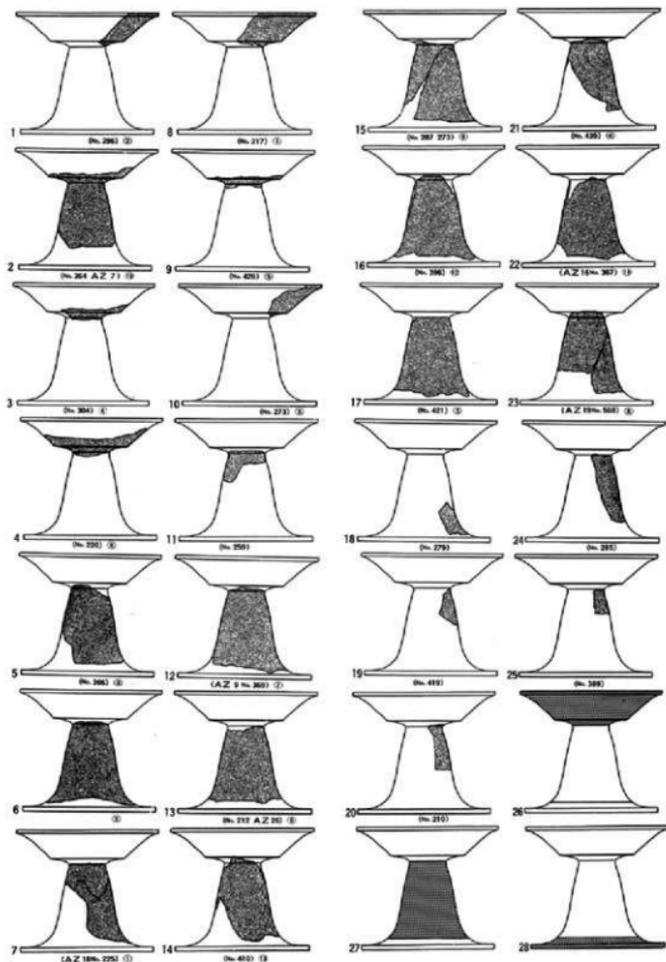
第36図 上浅川遺跡第2次調査出土土器実測図

K V 49出土 1~13



第37圖 上浅川遺跡第1次調査出土土器実測図
 第2次調査出土土器実測図

KY49出土1~6
 KY2出土7, KY1出土8・9



■ 現存部分 坏部 1・3・4・8~10 脚部 2・5~7・11~25 ()は遺物番号 ○は押印番号

■ 破損概念図 坏部の破損26 脚部の破損27 底部の破損28

第38図 上浅川遺跡第2次調査出土高坏破損分類図

5 ま と め

今回の報告書は第1次調査、第2次調査を一括した形でまとめたものであり、紙数の関係で概略的な内容となった。ことに第1次調査出土の陶磁器、古銭、鉄器等は触れる機会がなかった。

また木器、礫器も同様であり遺構等の関連性ともからみ問題が残る。昭和60年度には上浅川遺跡の最終発掘調査が実施される計画となっており、上記の問題も含め総合的な結論を出したい。

従って、ここでは上浅川遺跡の概要を述べるにとどめておく。1次、2次調査で判明した成果をまとめると次の様になる。1つは遺構の分布状況で、道路を境に東側が中世の集落を構成し、西側が縄文中期と古墳時代終末期から奈良時代の集落とに別れる。前者の中世集落はNo344の萩の森遺跡に連結することが判り、大規模な集落構成を呈していたものと考えられる。特に1次調査では大形の溝状が、ある程度の企画をもって配置されその内外に建物を設けると推測される。

さらに溝内からは平礼鳥帽を用いた木偶状の呪符人形や駿馬の発見、中国明前半期の皿等の発見があり中世期における政治的色彩の強い遺跡と考えられる。2次調査では大形の溝を中心に建物跡とみられる柱穴や竪穴住居跡が認められ、その大半は7世紀～8世紀の時期である。

この年代は戸塚山古墳群の終末期古墳と同時期であり、古墳と集落との関連を示めるとして注目される。

2つは、戸塚山及びその周辺の中世の塚や館との結び付である。米沢市を中心とした置賜には全国的にも類のない程の館跡が存在する。にもかかわらず、中世の集落跡の検出はこれまでになく、上浅川遺跡のもつ意義は大きいと云えよう。戸塚山古墳群、そしてその周辺に分布する上浅川遺跡を含む50数箇所の遺跡は、松川と梓川にみまわれ縄文から中世に亘る長い年月の中で脈々と貴重な文化を守り続け、今や米沢屈指の大遺跡群を確立したと云っても過言ではない。

今後は上浅川遺跡の発掘を契機にさらに充実した文化財発展を望むものである。

最後に本調査及び報告書をまとめるにあたって様々な面で献身的な御協力及び御理解を賜りました上郷地区史跡保存会、地元上浅川地区及び地権者の方々に対し心より感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 手塚 孝・亀田晃明(1981)「笹原」『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第7集 米沢市都市計画課
加藤 稔・亀田晃明・手塚 孝(1983)「戸塚山第137号墳発掘調査報告書」第1集 『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第9集 米沢市教育委員会
手塚 孝・亀田晃明・菊地政信(1984)「戸塚山古墳古群詳細分布調査報告書」『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第10集 米沢市教育委員会

圖 版



▲発掘前状況



▲遺構全景



▲KY 1, KY 2 発掘状況

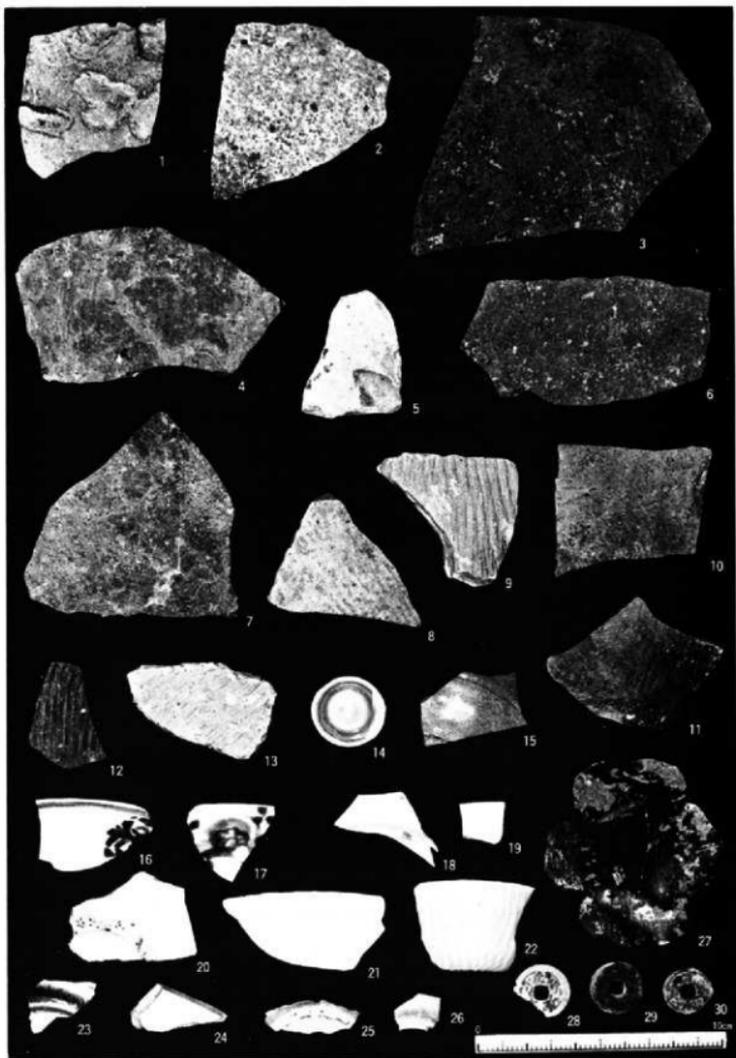


▲木偶状人形出土状況



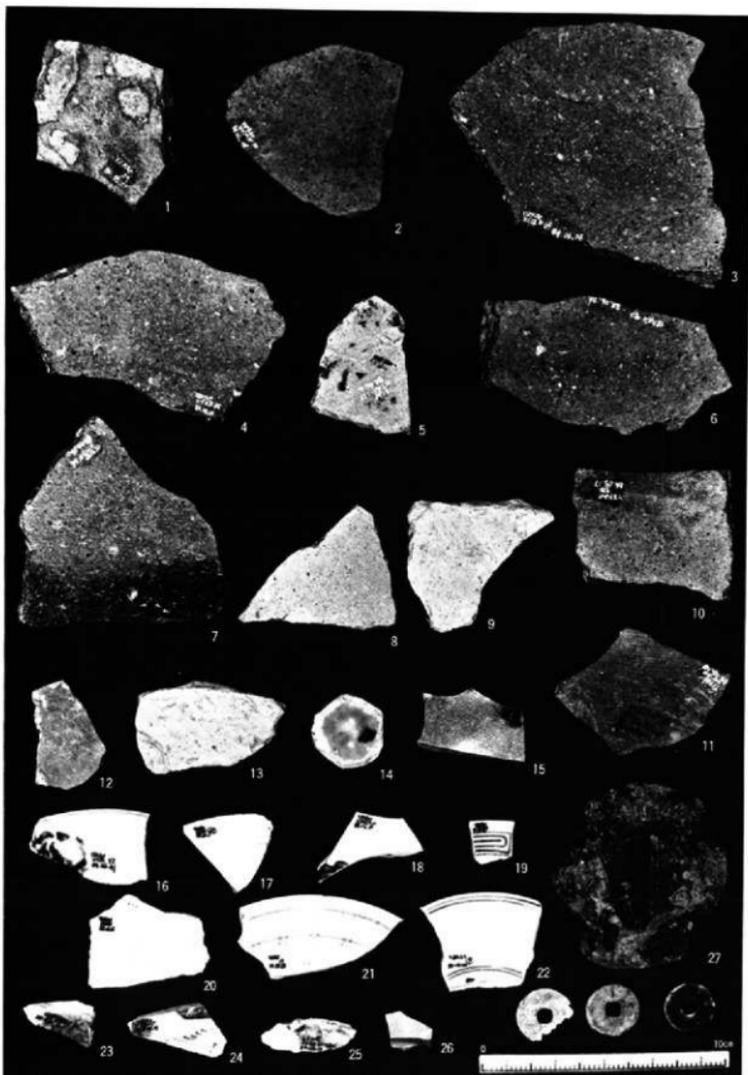
KY 1 出土11, KY 2 出土10, KY 3 出土1・5・14, KY 9 出土8, KY 17 出土13,
KY 12 出土15~17, KY 21 出土9, KY 25 出土2~4・6・7・12





KY 1出土 1・2・10・12・14~16 KY 2出土 23・28, KY 6出土 25, KY 12出土 3・4・6・7
 KY 14出土 5・22 KY 20出土 17, KY 21出土 27, KY 25出土 18~20・24, KY 16出土 29
 G 40-20出土 8・9・11・30

第六図版 上浅川遺跡第一次調査出土の土器(4)

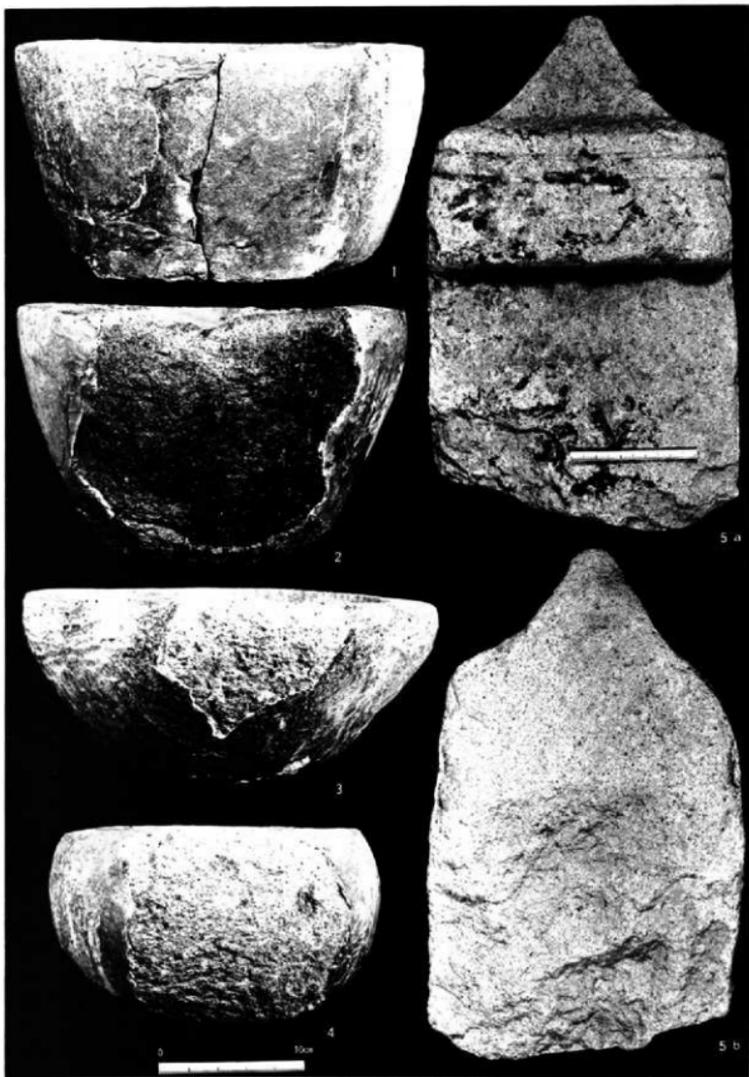




KY 6 出土

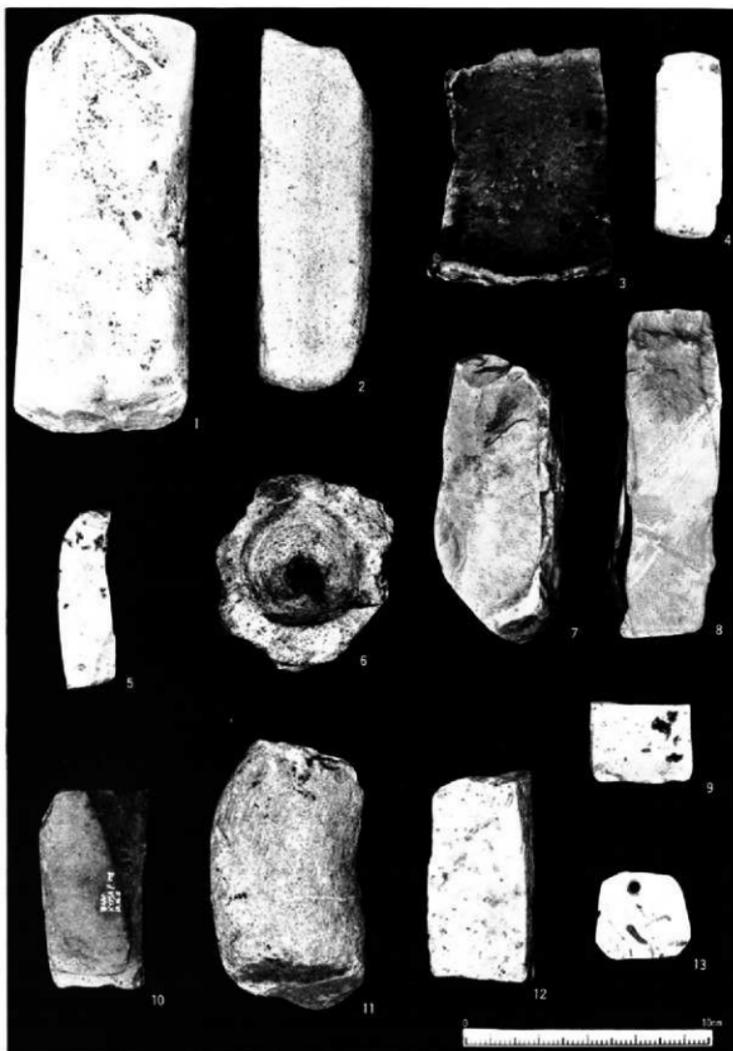


KY 2 出土 1 KY 21 出土 2 KY 49 出土 3 (2次調査)



KY 1出土3, KY 2出土1, KY 3出土5, KY 25出土2, KY 21出土4

第十四版 上浅川遺跡第一次調査出土の標榜(2)



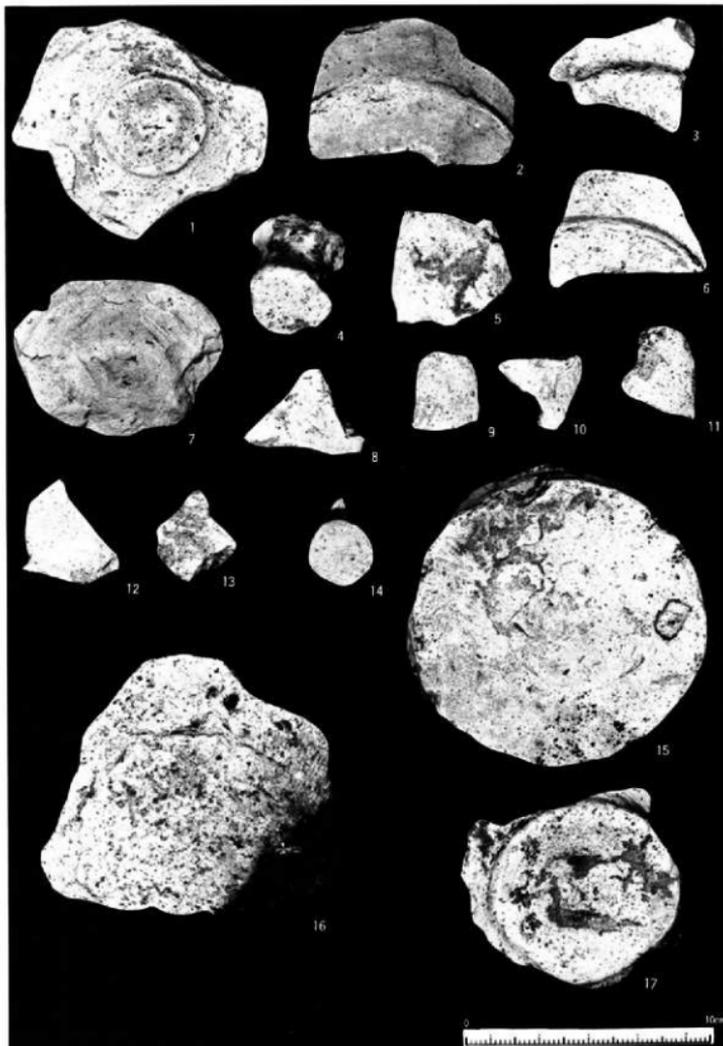


KY 1 出土 4~6・8~10・12・13 KY 2 出土 1・3 WY 1276 出土 2 WY 122 出土 7
WY 92 出土 11

第十二図版 上淺川遺跡第一次調査出土の木簡(丁)



KY 25 出土 1, KY 1 出土 2・3



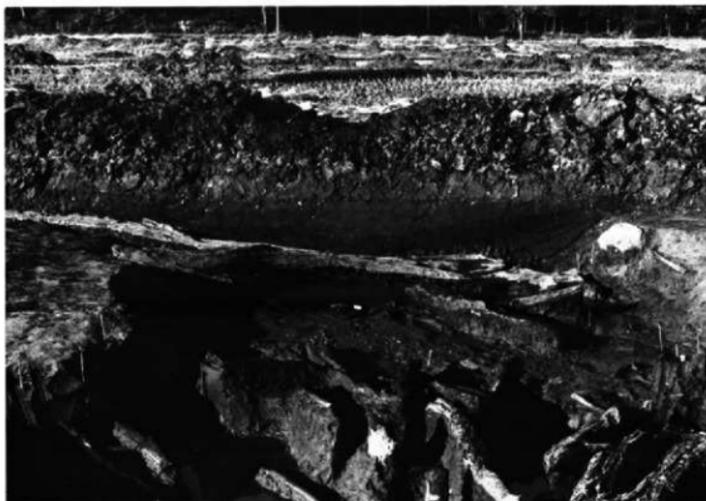
TY 1275 出土 1, TY 594 出土 4, TY 196 出土 6, TY 602 出土 5
TY 225 出土 2, TY 142 出土 3



▲発掘前状況



▲発掘状況

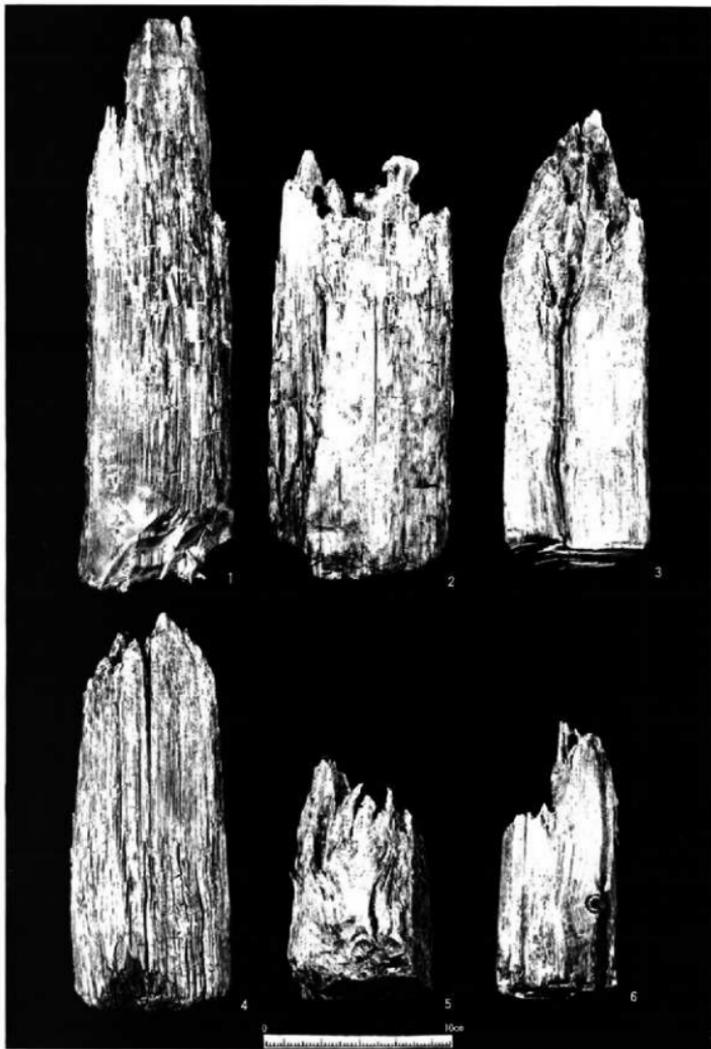


▲KY 49 北壁セクション

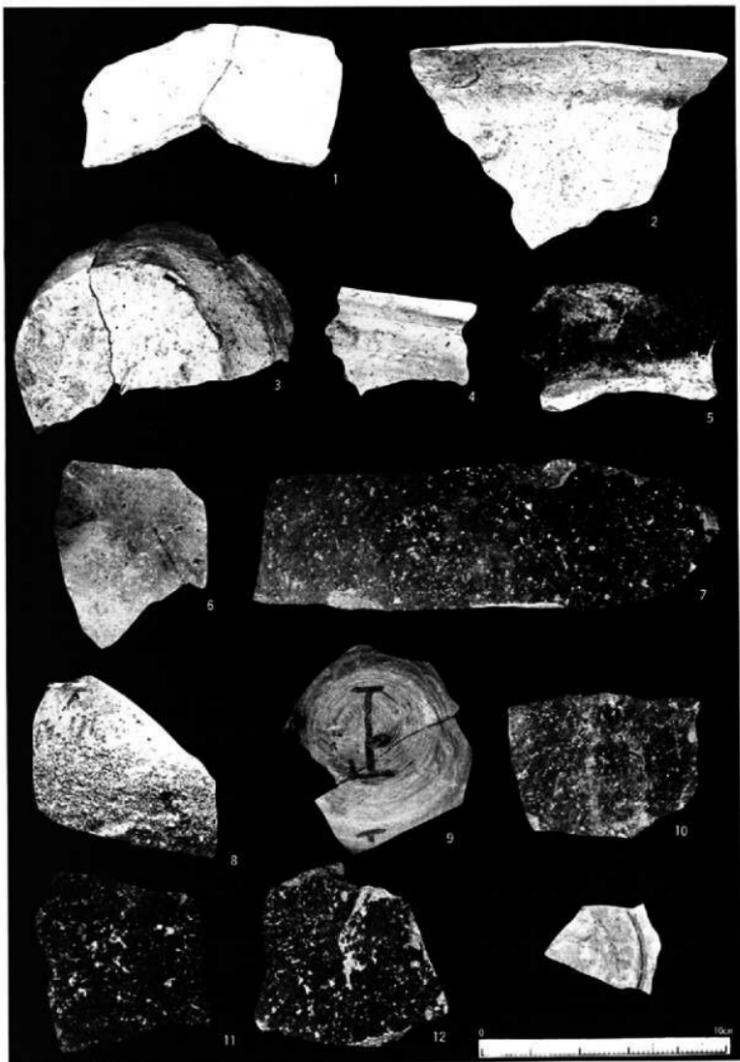


▲KY 49 発掘全景

第十六図版 上滝川遺跡第二次調査出土の土器(1)

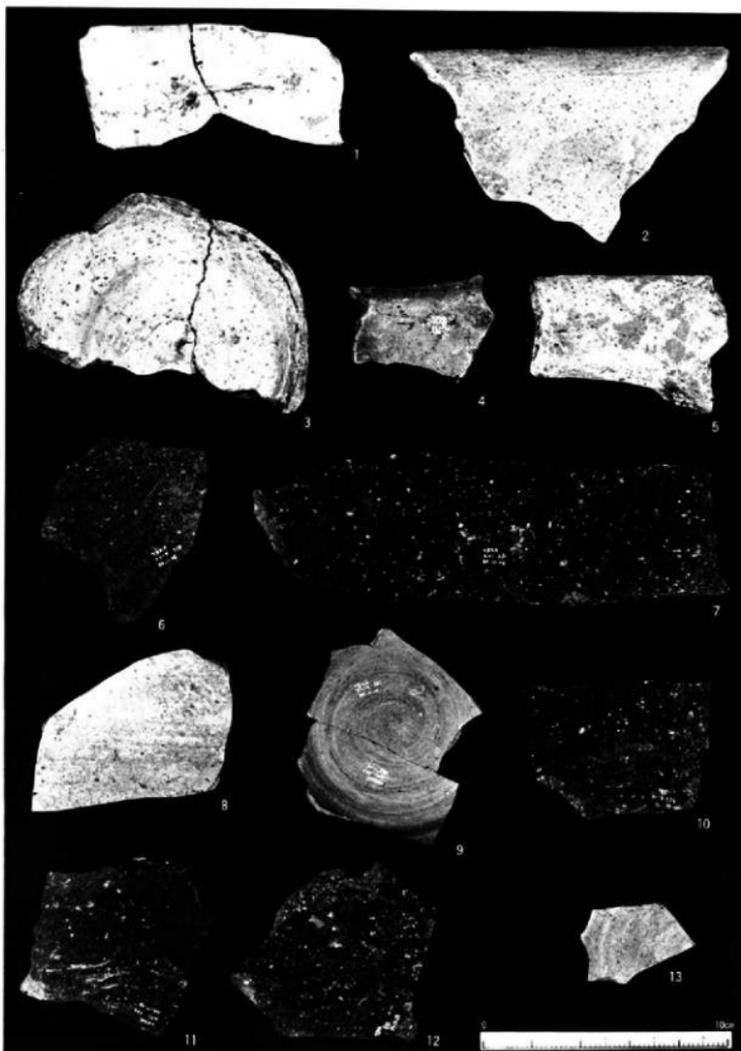


KY 49 出土 1~17



KY 49 出土 1~13

第十八図版 上浅川遺跡第二次調査出土の土器(3)

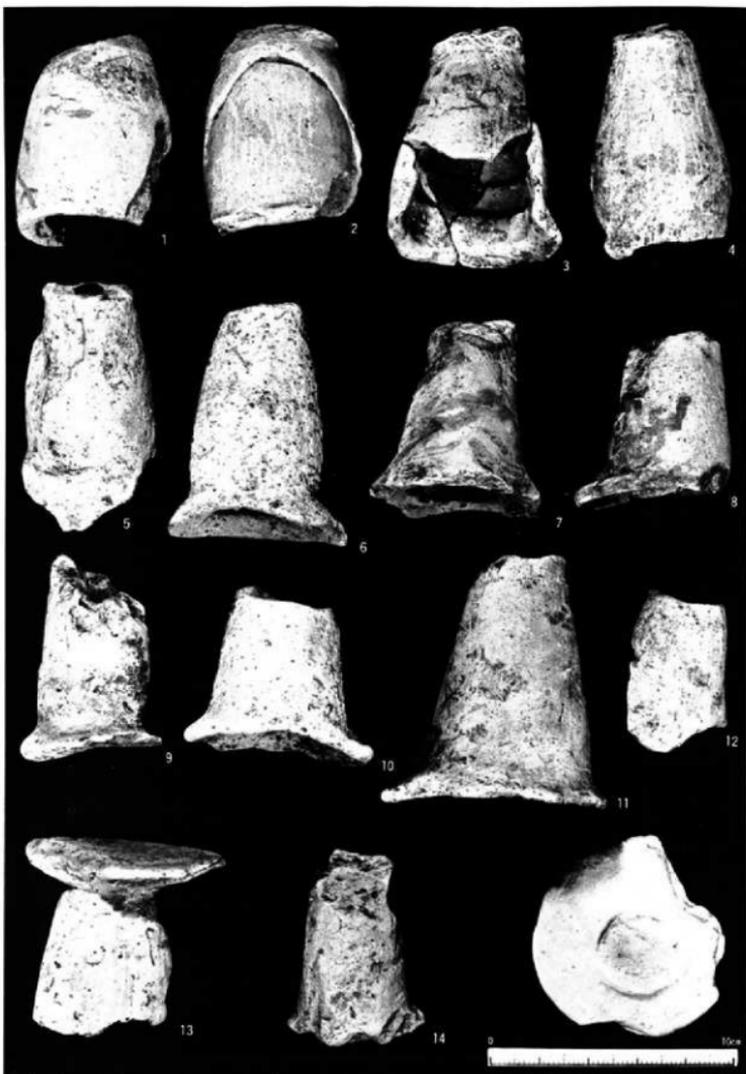


KY 49 出土 1~13

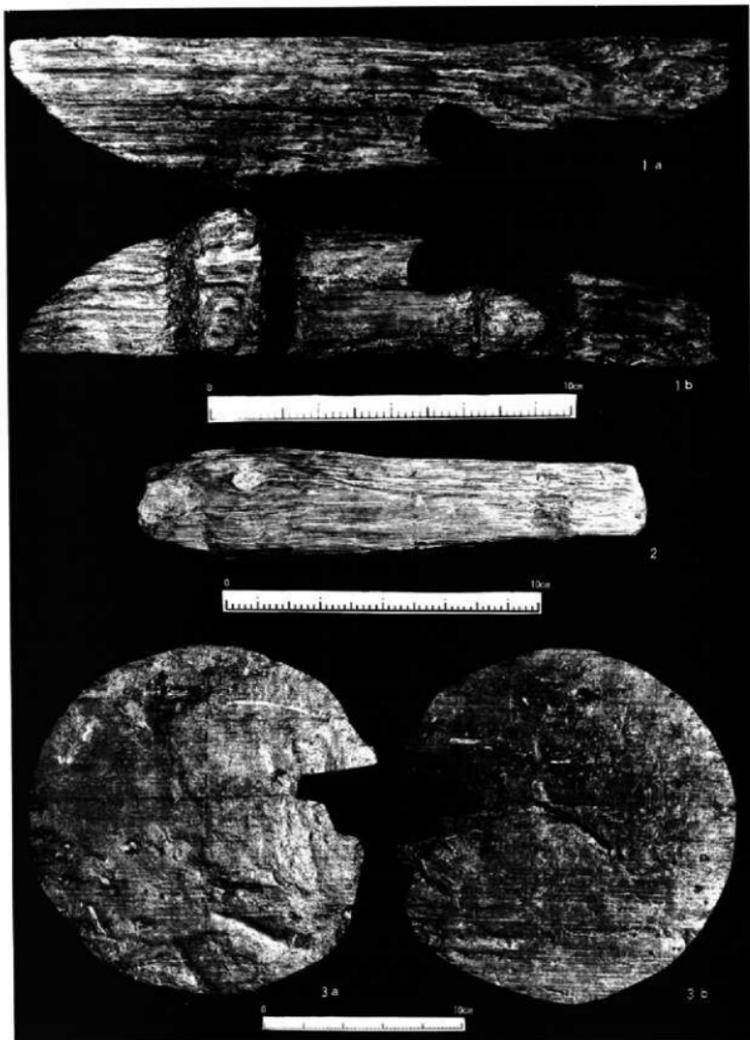


KY 49 出土 1~7, 9~14, 16 G120~125 出土 8 第1次調査 KY 1 出土 15

第二十図版 上滝川遺跡第二次調査出土の土器(5)



KY 49 出土 1~15



KY 49 出土 1~3

昭和60年3月30日発行

上 浅 川 遺 跡

発行 米 沢 市 教 育 委 員 会
米 沢 市 金 池 三 丁 目 1-14
置 賜 総 合 文 化 セ ン タ ー 内
印刷 嶋 よ ね ざ わ 印 刷
米 沢 市 城 西 二 丁 目 3-72